

# 博多 150

- 博多遺跡群第196次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1268集

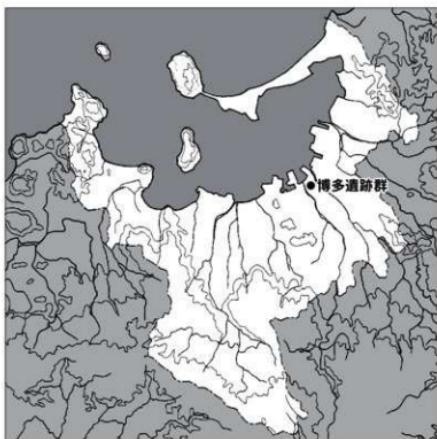
2 0 1 5

福岡市教育委員会

はか　た  
博　多　150

はかた　いせきぐん  
- 博多遺跡群第196次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1268集



遺跡略号 HKT-196  
遺跡調査番号 1313

2015

福岡市教育委員会



1. 1区全景（西から）



2. 2区・3区全景（南西から）

## 序

古くから中国大陸や朝鮮半島との対外交流の窓口として栄えた福岡市には、古代の浦臘館跡や中世の博多遺跡群などに代表されるように、彼我の交流を直接担う機能を持っていた官衙や施設等が遺跡として地下に残され、また海外からもたらされた舶載品をはじめ、数多くの文化財が今なお地下に保存されています。このような遺跡や遺物を子々孫々に守り伝えていくことは現代に生きる私たちの責務ですが、その多くが市街地の再開発に伴って発見されることから保護を図っていくことは困難な状況にあります。

福岡市教育委員会では、遺跡を保護するとともに、再開発等によって遺跡が破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録保存を図っています。本書は、博多遺跡群内に位置する博多区御供所町の博多高等学園の解体工事に伴って実施した博多遺跡群第196次調査成果について報告するものです。調査地は国史跡聖福寺境内の指定地内にあり、これまで学校用地として教育委員会が聖福寺より借用していましたが、学校移転により土地を返却するにあたり、校舎解体工事によって影響を受ける部分についての確認調査を行いました。当該地は博多遺跡群の東端部にあたり、これまで調査例が少なく遺跡の様相があまり分かりませんでしたが、今回の調査により中世後半期の屋敷の区画溝とみられる遺構等を確認するとともに、弥生時代から近世までの遺物が出土し、連綿として人々の利用を受けた土地であったことが分かりました。

発掘調査にあたり、地権者である聖福寺にご協力頂いたことを感謝申しあげます。また、関係者のご尽力により、調査を円滑に進めることができましたことについて深くお礼を申し上げます。この報告書が幅広く活用され、文化財保護への理解を深める一助となれば幸いと考えます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

## 例　言

1. 本書は平成25（2013）年7月1日から10月24日に福岡市教育委員会が行った、福岡市博多区御供所町23-1、22-9～16所在の博多遺跡群第196次調査の報告書である。
2. 発掘調査と整理報告書作成は、教育委員会から経済観光文化局への令達事業として実施した。
3. 検出遺構には3桁の連番号を付し、遺構の性格を示す記号として、SA（柱列）、SD（溝・河川）、SE（井戸）、SK（土坑・土壙墓）、SM（埋め土）、SP（柱穴・ピット）、SX（その他の遺構）を頭に付した。
4. 本書に使用した遺構実測図は、吉武学・佐々木蘭貞が作成した。
5. 本書に使用した遺物実測図は、吉武が作成した。
6. 本書に使用した図の製図は、吉武・萩尾朱美が行った。
7. 本書に使用した写真は、吉武が撮影した。
8. 本書に用いた座標系は世界測地系である。
9. 本書の図に使用した方位は全て磁北であり、この地域では座標北より6° 02' 西偏する。
10. 出土人骨の観察は上角智希（福岡市埋蔵文化財センター）が行った。
11. 本書の執筆および編集は、吉武が行った。
12. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理する。

遺　跡　名	博多遺跡群	調　查　次　数	196次	遺跡調査番号	1313
遺　跡　略　号	HKT-196	所　在　地	福岡市博多区御供所町23-1、22-9～16		
分布地図番号	48-0121	申　請　地　面　積	- m <sup>2</sup>	調査対象面積	1,847m <sup>2</sup>
調　査　面　積	1,600m <sup>2</sup>	調　査　期　間	2013年（平成25年）7月1日～10月24日		
調　査　地　地　籍	福岡市博多区御供所町23-1、22-9～16				
調査地住居表示	福岡市博多区御供所町8番1号				

# 目 次

第一章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	1
3. 遺跡の位置と環境.....	2
第二章 発掘調査の記録.....	5
1. 発掘調査の方法と経過.....	5
2. 発掘調査の概要.....	5
3. 検出遺構と出土遺物.....	7
(1) 建物遺構.....	7
(2) 溝.....	8
(3) 河川（旧石堂川流路）.....	16
(4) 井戸.....	23
(5) 土坑.....	25
(6) 近世墓.....	34
4. その他の出土遺物.....	35
第三章 おわりに.....	36

# 挿図目次

Fig. 1 博多遺跡群の位置と地形 (1/25,000) .....	2
Fig. 2 調査地点位置図 (1/1,000) .....	3
Fig. 3 調査区位置図 (1/600) .....	4
Fig. 4 1区全体図 (1/150) .....	6
Fig. 5 2区・3区全体図 (1/150) .....	(折り込み)
Fig. 6 建物遺構SP105・106実測図 (1/40) .....	7
Fig. 7 溝SD010・032実測図 (1/60) .....	8
Fig. 8 SD010・032出土遺物実測図 (1/3) .....	9
Fig. 9 溝SD015・026・035実測図 (1/60) .....	10
Fig. 10 SD015出土遺物実測図 (1/3) .....	11
Fig. 11 溝SD020実測図 (1/60) .....	11
Fig. 12 SD020出土遺物実測図 (1/3) .....	12
Fig. 13 溝SD068実測図 (1/60) .....	13
Fig. 14 SD068出土遺物実測図 (1/3) .....	13
Fig. 15 溝SD100実測図 (1/60) .....	14
Fig. 16 SD100出土遺物実測図 (1/3) .....	15
Fig. 17 溝SD101及び建物遺構SP105・106実測図 (1/60) .....	16
Fig. 18 1区の河川SD007実測図 (1/300) .....	17

Fig.19	1D区～1F区トレンチ土層断面実測図 (1/60)	18
Fig.20	1B区・1C区トレンチ土層断面実測図 (1/60)	19
Fig.21	1区 (SD007ほか) 出土遺物実測図1 (1/3)	19
Fig.22	1A区トレンチ土層断面実測図 (1/60)	20
Fig.23	1区 (SD007ほか) 出土遺物実測図2 (1/3)	20
Fig.24	2区の河川SD150実測図 (1/60)	21
Fig.25	SD150土層断面実測図 (1/60)	22
Fig.26	SD150出土遺物実測図 (1/3)	22
Fig.27	井戸SEO43実測図 (1/40)	23
Fig.28	SEO43出土遺物実測図 (83は1/4、他は1/3)	24
Fig.29	土坑SK011・014・021・025・030・036実測図 (1/40)	26
Fig.30	SK011・014・021・025・030出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig.31	土坑SK037・045・061・096・099実測図 (1/40)	28
Fig.32	SK037出土遺物実測図 (113は1/4、他は1/3)	29
Fig.33	SK061・096・099出土遺物実測図 (1/3)	30
Fig.34	土坑SK110・111・113・117・118・119・120実測図 (1/40)	32
Fig.35	SK110・113・118出土遺物実測図 (1/3)	33
Fig.36	土壤墓SK151・152実測図 (1/20)	34
Fig.37	その他の出土土器・土製品実測図 (1/3)	35
Fig.38	石製品・鉄製品・銅製品実測図 (142～144は1/2、他は1/3)	36

## 図 版 目 次

巻頭図版 1. 1区全景 (西から) 2. 2区・3区全景 (南西から)

PL. 1	1. 1区全景 (南東から) 2. 1C区SD007 (石堂川流路落ち) 土層断面 (東から)
PL. 2	2区全景 (南西から)
PL. 3	1. 2区西半部 (東から) 2. 2区東半部 (南東から)
PL. 4	1. 2区溝SD068 (南から) 2. 2区溝SD100 (南から)
PL. 5	1. 2区溝SD101・建物遺構SP105・SP106 (南から) 2. 2区D-1グリッドSD150 (石堂川流路落ち) (南東から)
PL. 6	1. 2区C-D-3グリッドSD150 (石堂川流路落ち) (北西から) 2. 2区土壤墓SK151・152 (南から)
PL. 7	3区全景 (南西から)
PL. 8	1. 3区西半部 (東から) 2. 3区東半部 (南東から)
PL. 9	1. 3区溝SD010 (西から) 2. 3区溝SD020 (南東から)
PL.10	1. 3区井戸SEO43 (北西から) 2. 出土遺物 (縮尺不同)

# 第一章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

博多湾岸の砂丘上に形成された博多遺跡群が、地下鉄建設に伴う発掘調査により、中世貿易都市の姿を今に伝える重要な遺跡として注目されて40年を迎えるとしている。福岡市では博多遺跡群を保護するため、ビル建設などの開発行為が予定された場合には事前に試掘調査を行って遺跡の状況を確認するとともに、現状保存が困難な場合には地権者等の協力を得て発掘調査を行っている。

博多遺跡群第196次調査地点は、「国史跡聖福寺境内」指定地内に位置する。石堂川（御笠川）に面する当該地にはかつて御供所小学校が置かれ、平成16年には福岡市内居住の軽度知的障がいのある義務教育修了者を対象とする高等特別支援学校である博多高等学園として開校した。開校に伴う改修工事に先立ち、平成15年11月19・20日に校舎敷地内の6ヶ所に試掘トレンドを設けて遺構と遺物の残存状況について確認調査を行い（Fig.3）、申請地の大半は石堂川の氾濫原であろうとの予想に反してほぼ全域にわたり遺構が分布することが分かった。平成25年3月には同校の大浜小学校跡地への移転に伴い土地を聖福寺に返却することになり、平成25年度に解体工事が行われることになった。今回の発掘調査はこの解体工事による国史跡現状変更に伴って実施し、基礎撤去工事によりやむをえず影響を受ける部分についての確認調査を行ったものである。調査は経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課が主体となって行い、教育委員会から経済観光文化局への令達事業として平成25年7月1日～10月24日に発掘調査を、平成26年度に整理報告書作成を行った。なお、調査期間中の8月21・22日には職場体験学習として福岡市立東光中学校の生徒1名を受け入れた。

## 2. 調査の組織

**調査委託** 福岡市教育委員会

**調査主体** 福岡市教育委員会（経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課）

（発掘調査：平成25年度、資料整理と報告書作成：平成26年度）

**調査総括** 文化財部埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗（25年度）  
常松幹雄（26年度）

調査第1係長 常松幹雄（25年度）  
吉武 学（26年度）

**庶務** 埋蔵文化財審査課 管理係長 和田安之（25年度）  
内山広司（26年度）

管理係 横田 忍

**事前審査** 事前審査係長 加藤良彦（25年度）  
佐藤一郎（26年度）  
事前審査係 松尾奈緒子（25年度）  
福薗美由紀（26年度）

**調査担当** 埋蔵文化財調査課 主任文化財主事 吉武 学  
佐々木蘭貞

### 3. 遺跡の位置と環境

博多遺跡群は、博多湾岸に形成された砂丘と、その後の河川の堆積作用および人為的な埋め立てによって形成された微高地に立地する。基盤となる砂丘には海岸線と平行に伸びる三列の高まりがあることが現在の微地形等から伺い知れ、これを内陸側から砂丘1～3と仮称している。最も海側の砂丘3は文献資料から「息浜」と呼ばれるが、息浜が中世貿易都市博多の一部として都市化するのは鎌倉時代以降であり、博多遺跡群はまず内陸側の「博多浜」と仮称される砂丘1・2を起点として生成されていった。本来の博多浜は東に伸びていき、箱崎八幡宮が位置する「箱崎浜」へとつながっていたとみられ、中世には箱崎浜方面から博多に入る「松原口」が設けられていた。現在は御笠川の河口部分である「石堂川」が両者を隔てているが、かつては砂丘1の南で西へ折れて那珂川へと合流する「比恵川」として流れしており、戦国時代の開鑿により現在の姿に変えられた。今回の第196次調査地点は、箱崎浜へと伸びる砂丘が石堂川によって断ち切られた河岸部分に位置する。

宝永六年（1709）に貝原益軒が編んだ地誌「筑前国続風土記」は、大友氏の家臣・臼杵安房守<sup>うすきあわのすけ</sup>が石堂川を開鑿したと伝える。博多と住吉の間を流れていた比恵川による出水災害が多発したため、承天寺・聖福寺の裏（東）の松原に南から北へ真っ直ぐに掘ったという。博多の東縁にあたるこの部分は、現在も寺院が建ち並んで開発が少ないため発掘調査例が少なく、この記事についての考古学的な裏付けはできていない。これより以前の室町期の様子を描いたといわれる「聖福寺古図」によると、聖福寺の東側には溝と松原が描かれているのみであり、石堂川開鑿以前の姿を示したものと考えられる。また、中世博多の町の東限は承天寺や聖福寺の門前町までであり、寺院の裏手にまでは広がっていなかった。第196次調査地点は、この博多の東の外にあたる聖福寺の裏手に位置しており、文化期古図には聖福寺塔頭寺院のひとつである「禪居庵」の記入がある。禪居庵は聖福寺と同じ栄西建立の建仁寺塔頭の同名寺院が著名であるが、摩利支尊天堂としての顔を合わせ持つており、聖福寺の禪居庵も同様の性格を有していた可能性が考えられる。



Fig. 1 博多遺跡群の位置と地形(1/25,000)

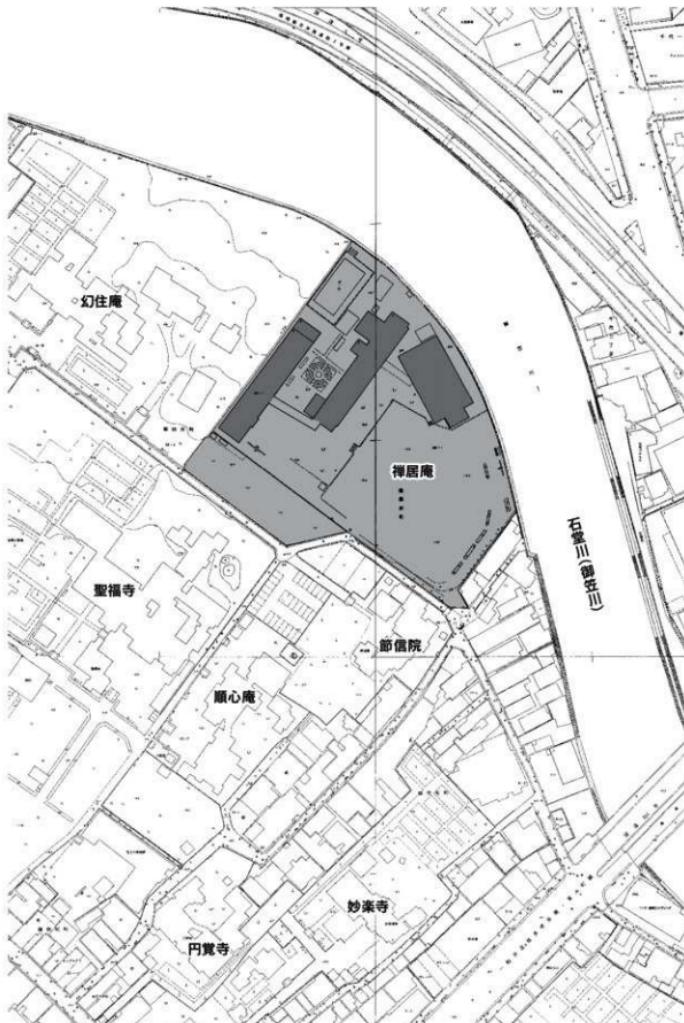


Fig. 2 調査地点位置図(1/1,000) ※薄アミは申請範囲、濃アミは発掘調査範囲

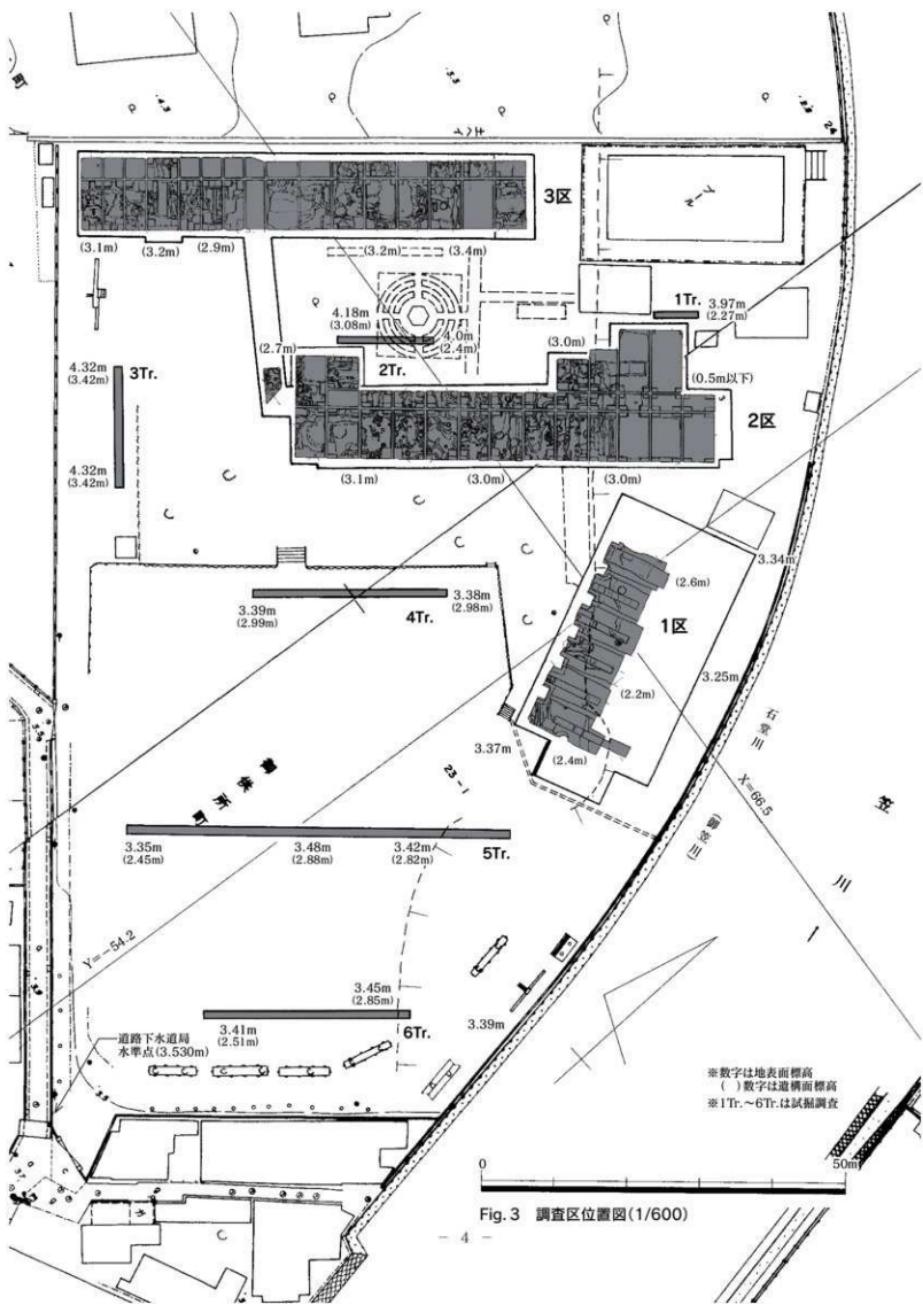


Fig. 3 調査区位置図(1/600)

## 第二章 発掘調査の記録

### 1. 発掘調査の方法と経過 Fig.3~5

校舎解体による国史跡の現状変更に伴う調査で、発掘調査の対象範囲は校舎2棟と体育館であるが、敷地返却にあたり基礎杭や地下埋設管を含めた全構造物を撤去することとなり、全ての構造物について解体撤去時に立会調査を行った。プールや倉庫等小規模構造物、上・下水道管等の埋設管の撤去工事全てを対象としたが、一部を除きこれらの工事による掘削が遺構面や包含層に影響を及ぼすことは稀であり、ほぼ表土層や建設時の掘り方内（擾乱層）におさまっていた。

発掘調査については、解体施工業者と工程調整の結果、施工順に体育館（1区）、北校舎（3区）、南校舎（2区）の順に行うことになった。発掘調査は地上部分の校舎撤去が終了した段階で行ったが、地下の布基礎が縱横に残り、調査区が多数の小区画に寸断されたうえ、地表下約90cmまで布基礎建設による根切り工事で一律に削平を受けて深く、作業上の足場確保に手間を要した。

発掘調査にあたっては、建物基礎による小区画をそのままグリッドとし番号を付けた。1区は南からA～G、2区は東（正確には北東）からA～N、3区は同じくA～Pである。2・3区は基礎で更に細かく分断されたため、南（正確には南東）から1～3の枝番号を付した。以下の遺構説明においては、その位置をこのグリッド名で示している。

調査記録の基準線は1～3区の調査区ごとに設定し、のちに国土交通省所有、福岡市財政局技術監理部技術企画課所管の都市基準点（3級・世界測地系）を用いて第II座標系上に位置付けた。また、海拔標高（東京湾平均海面/T.P.）は旧御供所小学校時代に設置された道路下水道局水準点から引用した。また、今後の現状変更に伴う遺跡の保存に備えて、試掘調査や今回の調査で得られた遺構面標高の数値をFig.3に「（ ）」で示した。

### 2. 発掘調査の概要 Fig.4・5

各調査区は地表下約90cm（地下基礎の深さと同じ）まで一律に削平を受けており、試掘調査により2面を想定していた上面の遺構面はほとんど残らない。ただし2区のG～Kグリッドは比較的残りが良く、地山砂丘の上面を暗褐色砂の包含層が薄く覆う部分があり、この面で土坑SK011・SK096等を確認したが遺構 자체は少ない。暗褐色砂の下層は基盤である風成砂層であるが全体的に薄く、厚いところでも1m掘り下げる粗砂層へと移行する。

1区は南からA～G区としたが、G区は河川内であったため重機で掘削して状況を確認した後、すぐに埋め戻した。2・3区では校舎基礎による擾乱のほか、昔の校舎の建て替えに伴う解体材（赤レンガ等を含む）の廃棄坑が多数あり、遺構の残りは断片的である。全体図で遺構図が空白となっているグリッドは、擾乱等により完全に破壊されている部分である。また、各グリッドの隅角には昇降段を設けたため、この部分は未掘となっている。

検出した遺構は河川1、溝5、土壙墓2、井戸1、土坑18、柱穴少數、及び包含層である。遺構はいずれも覆土が暗褐色砂で15～16世紀頃に属するものとみられ、聖福寺に関連するものと考えられる。河川（SD007・150）は石堂川へ向かって落ちていき、中世包含層を切り、近世遺物を含む客土で埋められている。溝は幅3～6m前後で、いずれも聖福寺を中心とする周辺区画の方向に沿う。

出土遺物はコンテナ34箱で、瓦等の中世遺物の他、弥生土器（甕棺片含む）や古墳時代～古代の土器も出土するが、該期の明確な遺構はない。中世に大きく削平された可能性が考えられる。

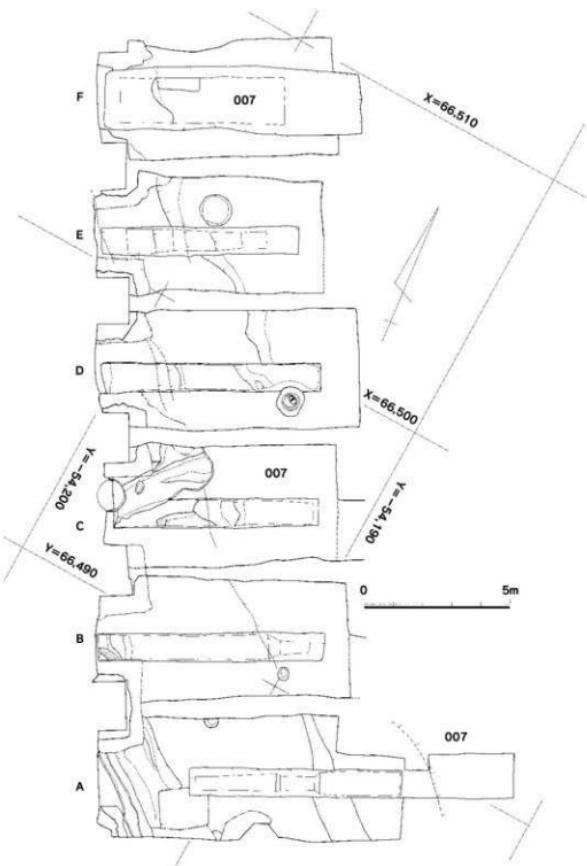
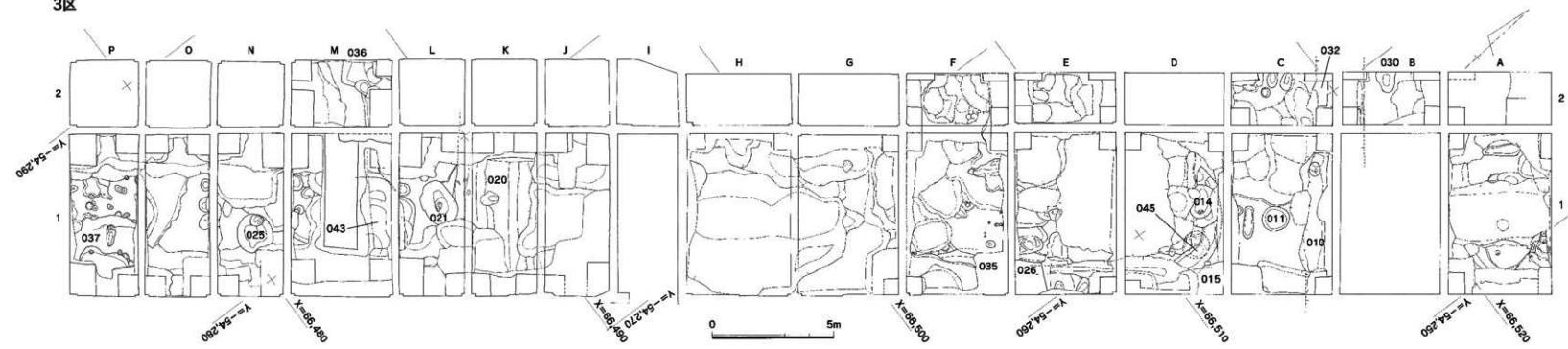


Fig. 4 1区全体図(1/150)

3区



2区

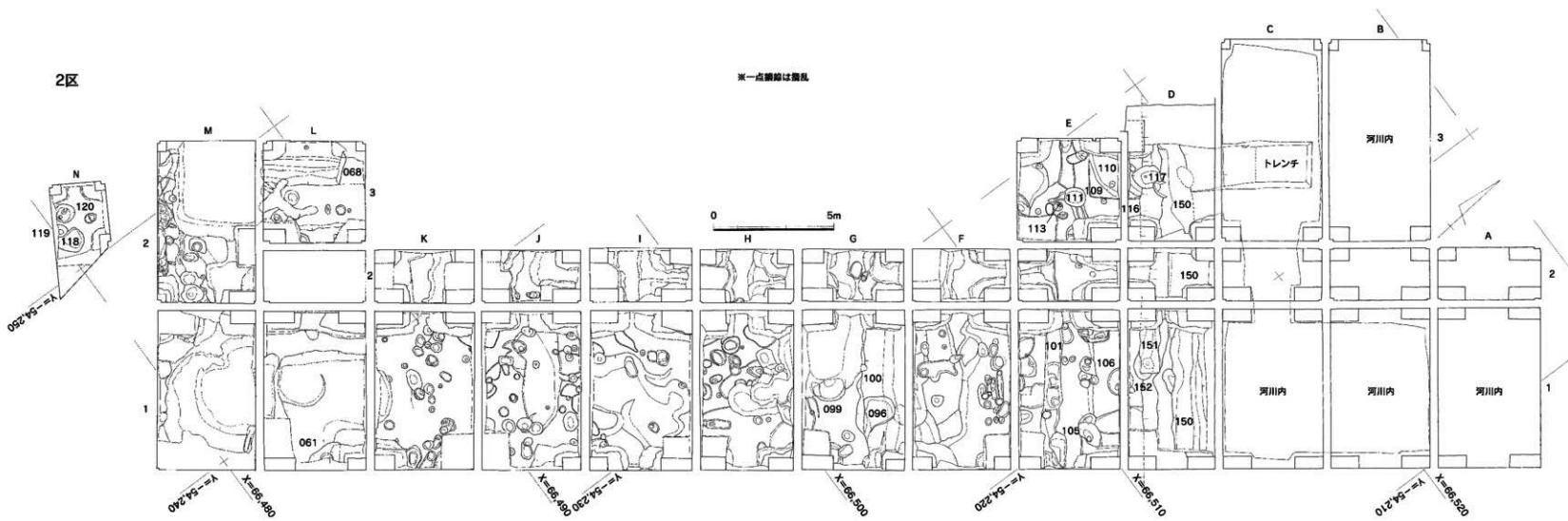


Fig. 5 2区・3区全体図 (1/150)

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 建物遺構

##### 建物遺構SP105・SP106 Fig.6、PL.5

2区のE-1グリッドに位置する。柱穴底面に平らに扁平礫を敷いた遺構である。2つの柱穴を検出し、柱間は3.2mを測る。調査区が狭く、かつ周辺が攪乱により大きく破壊されているためか、他に組になる柱穴は認められない。二つの柱穴を結んだ主軸方位は磁北から49°西偏する。

東に位置するSP105は、東西にやや長い不整規円形プランをなし、長径1.3m、短径0.7mを測る。断面逆台形状をなし、深さは約70cmである。底面に接して径20cmほどの扁平礫を置いている。西のSP106は複数のピットに切られるが、やはり楕円形プランをなすものと考えられる。長径は不明で、短径は0.65mを測る。断面円筒形に深さ70cmほど掘り込んでおり、底面に径25cm弱の扁平な礫を敷いている。柱穴覆土はともに暗褐色砂ないし灰白色砂（地山土）を主体とする。柱痕跡は確認できなかった。

南側にこれと並行で走る溝SD101があり（16ページ参照）、柱列に伴う溝である可能性も考えられる。柱列との間は1.2m前後をあける。ただし厳密には主軸方位がやや異なっている。

建物もしくは塀の一部とも考えられる遺構であるが、確証はない。

SP105は土師器小片4点、施釉陶器小片1点が出土したが、図示できるものはない。

SP106は弥生土器、土師器小片5点が出土したが、図化可能な遺物はない。

中世の遺構とみられるが、詳細時期は不明確である。

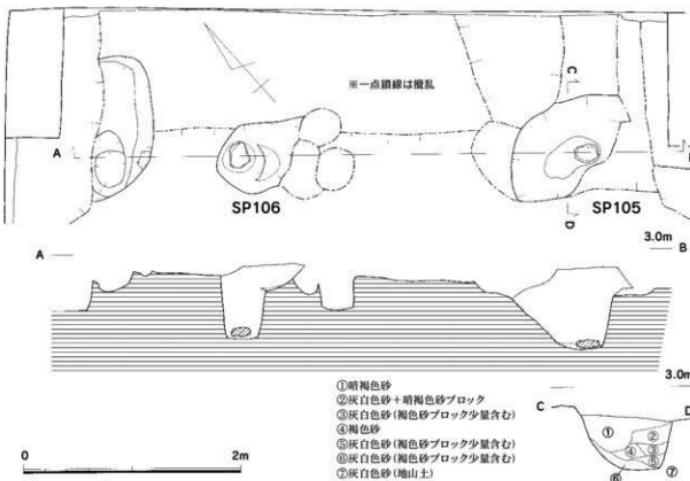


Fig. 6 建物遺構SP105・106実測図(1/40)

## (2) 溝

溝は6条を検出した。概ね調査区（校舎基礎）と平行する方向に伸びるもので、聖福寺の関連建物等の区画に伴うものと考えられる。

溝SD010 Fig.7, PL.9

3区のC-1グリッドで検出した。主軸方位は調査区と平行しており、磁北から約48°西へ振れる。隣のC-2グリッドで確認したSD032はこの溝の続きである。溝の南岸のみの確認であり、北岸があるべきB-1グリッドは擾乱により地表から3mまで破壊されているが、B-2グリッドに僅かに北岸の一部を確認することができ、溝幅は2.0~2.5m程度とみられる。直線的に伸びる溝と見られる。横断面形は逆台形状を呈し、遺構検出面から底面まで最大80cmを測る。底面に著しい勾配は認められない。覆土は暗褐色砂質土で、水の流れたような痕跡はない。

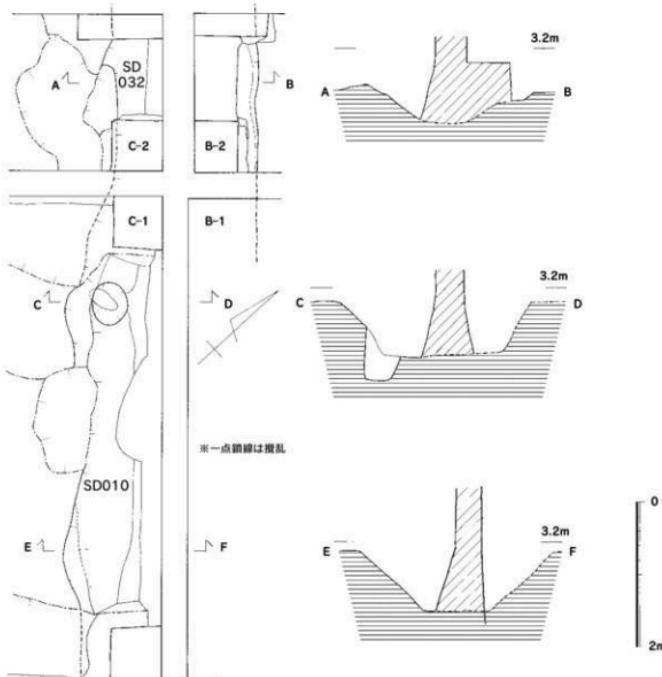


Fig. 7 溝SD010-032実測図(1/60)

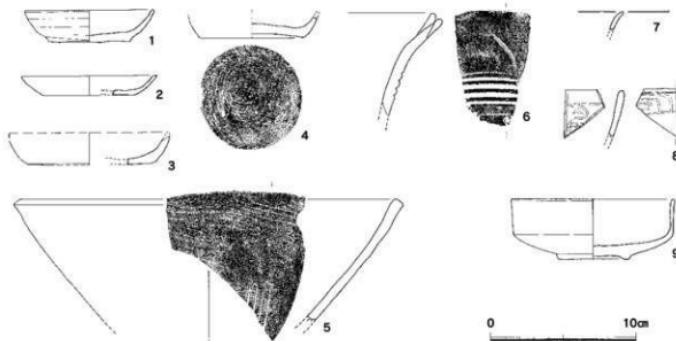


Fig. 8 SD010-032出土遺物実測図(1/3)

**SD010出土遺物 Fig.8**

弥生土器、須恵器、中世土師器（小皿・皿）、土師質土器（すり鉢）、国产陶器、中国产陶磁器（口禿白磁・明代龍泉窯系青磁）、近世肥前系陶器（唐津）、瓦、鉄片がコンテナ1箱出土した。

1~4は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、1は板压痕がある。口径は、1が8.8cm、2が9.2cm、3が11.0cmで、4は不明。4はSD032出土。5は土師質土器のすり鉢小片で、外面に煤が付着し、煮炊きに使用している。6は瓦質土器の捏ね鉢か。外面にヘラミガキを加え、絞線4条とその上下に列点文を施す。7は口禿白磁碗の口縁部小片である。8は龍泉窯青磁碗の口縁部小片で、外面に削れた雷文を施す。9は唐津陶器の腰折れ碗で、上層から出土した。

上層は近世遺物が混じるが、1・3・6・7が下層より出土しており、15世紀頃の遺構と考えられる。

**溝SD015・026・035 Fig.9**

3区のD-1グリッドからF-1グリッドに展開する溝状の遺構である。一連の溝として報告するが、調査区境や擾乱坑により分断されており、連続しない可能性もある。SD015はD-1グリッドで検出した弧状の溝である。調査区の北端で丸く湾曲するものと考えられるが、SK014に大きく破壊されており、詳細不明。西側は大きな擾乱で切られており、更に伸びていくか否かも不明。東側は一段深くなり、南に隣接するE-1グリッドのSD026へ続く。溝幅80cm前後、深さ20cm程で、調査区南東隅で深くなり50cmとなる。SD026はE-1グリッドの東端を調査区と平行に伸びる。擾乱に切られて残りが悪いが、溝幅80cm以上で、溝底面レベルはSD015南東隅とほぼ同じである。SD035はF-1グリッド東端部に僅かに残る。擾乱のため遺構のほとんどが失われており、溝幅等の詳細は不明。溝底面レベルはSD026と大差ない。以上の溝の覆土は、いずれも暗褐色砂質土である。

**SD015・026・035出土遺物 Fig.10**

SD015は弥生土器、中世土師器、瓦が少量出土した。瓦以外は小片である。10は平瓦小片で、磨滅するがナテ調整か。貫通する孔が一つあり、鉄錆が付着する。SD026は弥生土器、中世土師器、陶器が、SD035は中世土師器、陶器、瓦、鉄釘が少量出土したが、図示できるものはない。

中世の遺構であるが、詳細時期は不明である。

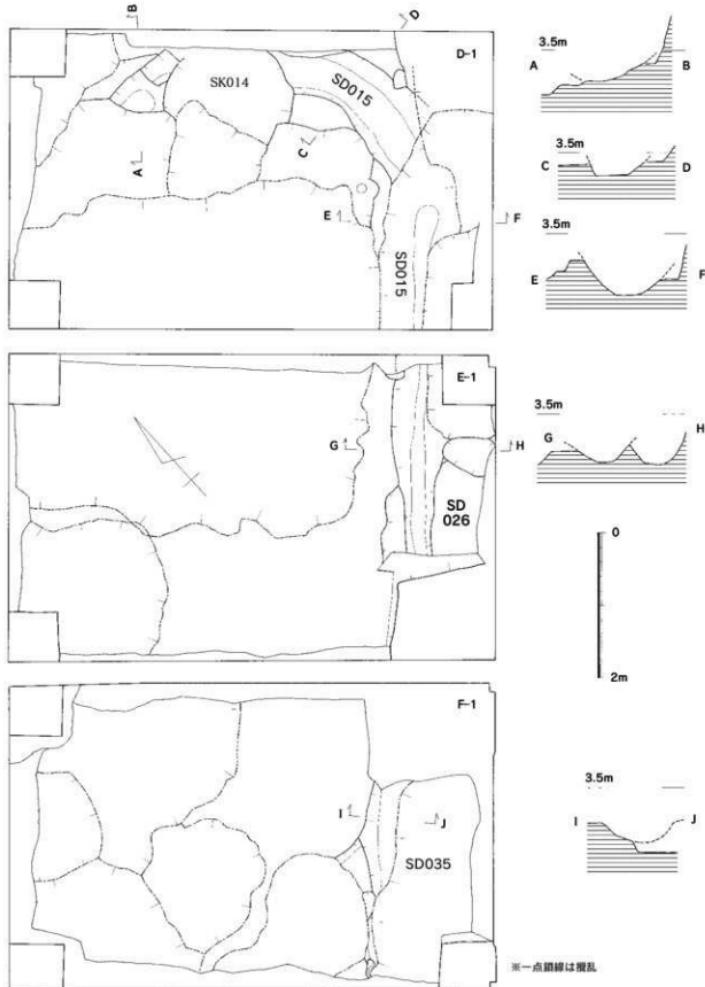


Fig. 9 溝SD015・026・035実測図(1/60)

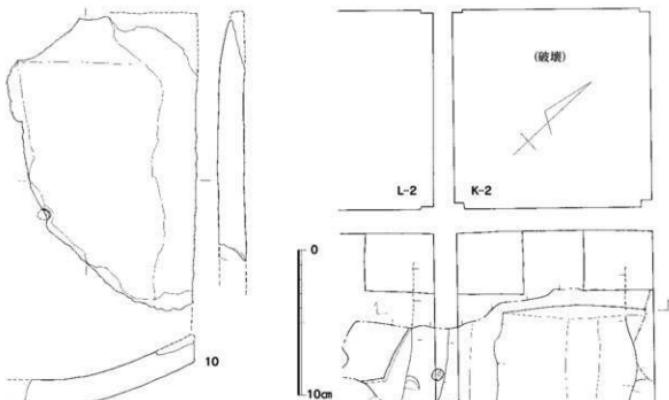


Fig. 10 SD015出土遺物実測図(1/3)

溝SD020 Fig. 11、PL. 9

3区のK-1グリッドを中心とした溝である。調査区と平行して直線的に伸びており、北西～南東方向に長い溝の一部と考えられる。主軸方位は磁北から48° 西偏する。K-1グリッドで長さ5m分を確認した。北西側は隣接するK-2グリッドへ伸びていくが、ここは攪乱による掘削が深くまで及んでおり、完全に破壊されて溝は残っていない。南東側は調査区外へ伸びて行く。南西側に隣接するL-1グリッドに溝の落ち際（南岸）の一部が残っており、ここから溝中央部分まで2.4mを測ることから、本来の溝幅は5m前後と推定される。一方、対岸（北岸）があるべきJ-1グリッドは、攪乱によって深く破壊され、遺構は全く残っていない。

溝の横断面は上層図に示す通り緩やかな傾斜のV字形をなし、深さ1.1mを測る。地山が砂地であることから、急傾斜の溝の掘削は困難であったものと考えられる。溝の覆土は砂質土もしくは砂であるが、水流があったような痕跡は認められなかった。屋敷地等を区画する役目を持つた溝と考えられよう。

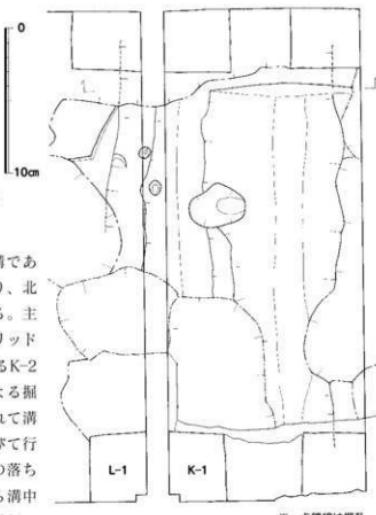


Fig. 11 溝SD020実測図(1/60)

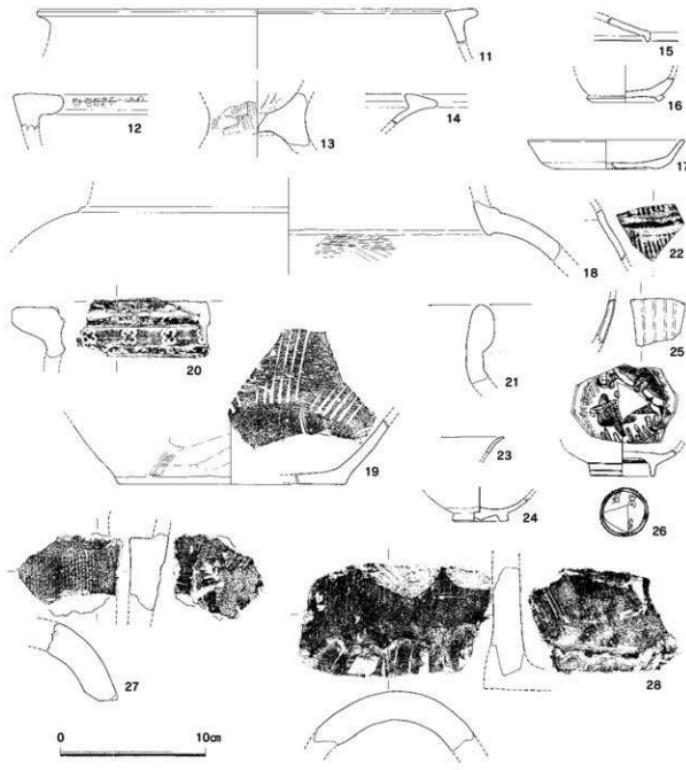


Fig. 12 SD020出土遺物実測図(1/3)

SD020出土遺物 Fig. 12, PL. 10

弥生土器、古代須恵器、中世土師器（皿）、土師質土器（壺・すり鉢）、瓦質土器（火鉢）、国産陶器、中国産陶磁器（白磁・龍泉窯系青磁・明代青花・陶器）、朝鮮半島産陶器（粉青沙器）、瓦、石製品（砥石）、鉄製品がコンテナ3箱出土した。遺物は3層に分離して取り上げており、上層1箱、中層1箱、下層1/2箱、その他1/2箱の量がある。

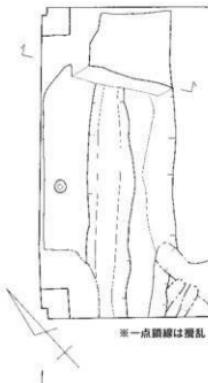
11～14は弥生土器である。11・12は壺の口縁部片で、断面が逆「L」字形をなす。12は外端部に木口で刻目を入れる。13は壺の底部で、脚が付く。14は壺又は高杯の口縁部片で、断面鋸先形をなす。15・16は古代の須恵器である。15は壺蓋で、口縁端部を下へ折り曲げる。16は小型の壺身で、高台を貼付する。

17は中世土器皿で、底部糸切り。小片であり、復元口径10.5cm。18は土師質土器で、壺であろう。頸部外面に低い突帯を付け、外面と頸部内面に丁寧なナデ調整を加える。胴部内面は粗い刷毛目調整後、細かい刷毛目調整を施す。19は土師質土器すり鉢で、内面に6本一組のスリ目を入れる。20は瓦質土器火鉢の小片で、口縁外面に印花文を施す。21は備前焼の大甕の小片で、口縁部を肥厚させる。胎土はあざき色に発色し、口縁端部から外面に自然釉がかかかる。

22は朝鮮半島産陶器の印花粉青瓶。外面に印花後、白土を塗って雑に拭き取り、透明釉をかける。内面は露胎である。23・24は白磁で、明代の製品か。23は碗の小片で全軸。24は底部片で、削り出し高台。外底は露胎である。25は龍泉窯系青磁碗で、外面にヘラ彫りで施文する。全軸で、軸層が厚い。26は明代青花の假頭心碗である。外底に吉祥句を書く。全軸で、唇付を釉剥ぎする。

27・28は丸瓦小片で、凸面に網目叩きを施し、ナデ調整を加える。凹面布目痕。28は瓦当に近い部位であろう。

以上は18・21等が溝の最下層から出土し、他は中層以上から出土した。16世紀後半頃に埋没した遺構と考えられる。



- ① 深褐色砂質土(複数)
- ② 暗褐色砂
- ③ 灰褐色砂+暗褐色砂ブロック
- ④ 暗褐色砂(②より明るい)
- ⑤ 暗褐色砂
- ⑥ 暗褐色砂+灰褐色砂ブロック
- ⑦ 灰褐色砂(地山)
- ⑧ 灰褐色砂(地山)

Fig. 13 満SD068実測図(1/60)

#### 満SD068 Fig.13, PL.4

2区のL-3グリッドの西壁際に位置する。調査区とはほぼ平行して直線的に伸びており、主軸方位は磁北から42° 東偏する。溝幅は現状で1.9mを測り、2mを大きく越えよう。横断面形は逆台形状をなし、深さ60cmで一端平坦面を造り、更に一段低い溝を掘る。底面の溝は幅40~60cmの細い溝で、深さ20cm。よって構造出面から最深部まで深さ80cmとなる。

#### SD068出土遺物 Fig.14

弥生土器、須恵器、中世土器、中国産陶磁器（白磁）、無釉陶器、施釉陶器、瓦、鉄釘、鉄片がコンテナ1箱出土した。出土遺物の大半は小片～細片にすぎない。

29は弥生土器の甕で、口縁が逆「L」字形に屈曲する。外面刷毛目調整。30は施釉陶器の壺で、朝鮮半島産陶器か。口縁端部に粘土帯を貼り付け平面を作り、ここに目跡が残る。胎土は緑褐色で、緑味の強い透明釉をかける。31は丸瓦の小片である。凸面に網目叩きがあり、凹面は布目痕をナデ調整する。

中世の溝だが、詳細時期は不明である。

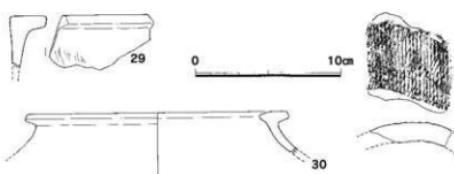


Fig. 14 SD068出土遺物実測図(1/3)

31

溝SD100 Fig.15、PL.4

2区のF～Gグリッドに位置する。主体はG-1グリッドにあり、長さ5.8mを確認した。主軸方位は磁北から48°西に偏し、調査区と平行する方向に長く伸びる溝の一部と考えられる。主として溝の南岸を確認しており、これに対する北岸はF-1グリッド南壁際で緩い落ち込みが認められるが、北岸自体は調査区境にあるものと想定され、溝幅は2m前後となる。北西側はG-2グリッドで落ち際の一部を確認したが、隣接のF-2グリッドとともに、攪乱により大きく破壊されており不明確である。溝の横断面形は傾斜の緩いU字形を呈し、遺構検出面から底面まで75cmを測る。覆土は汚染された黒褐色系の砂であるが、水流のあつた痕跡は認められず、区画溝と考えられる。

SD100出土遺物 Fig.16

弥生土器（甕）、古墳時代須恵器（甕）、古代須恵器（鉢）、古代土師器（甕）、中世土師器、土師質土器（こね鉢・すり鉢）、瓦質土器（羽釜・鉢）、中国産陶磁器（龍泉窯系青磁）、近代の染付、瓦（丸瓦・平瓦・棟瓦）、土製品（鍾）、石製品（石庖丁）、鉄製品（楕円鋤・鉄塊）がコンテナ2箱出土した。

32・33は弥生土器の甕で、口縁が逆「L」字形に屈曲する。34は古墳時代須恵器の甕の口縁部小片で、口縁端部外面に突起を巡らす。35・36は古代の須恵器蓋環である。35は小型の環身で外底にヘラ削りを加える。36は蓋で口縁端部が下方に屈曲する。37は古代の土師器甕である。胴部外面は細かい刷毛目、内面はヘラ削りで、口縁内外を横ナデ調整する。

38・39は土師質土器のすり鉢である。内面に5本一組のスリ目を入れ、外面は指押え後、ナデ又は刷毛目調整する。40は瓦質土器の羽釜である。胴部外面は丁寧にナデ調整し、内面は指押さえ後、刷毛目調整。口縁内外は横ナデ調整。焼して黒色に仕上げており、二次的加熱を受ける。41も瓦質土器で小型の鉢であろうか。内外横ナデ調整で、口縁外面の一部に刷毛目調整を加える。焼により内外面黒色を呈し、外面には煤が付着している。42は龍泉窯系青磁碗の口縁部小片で、外面に片切彫りで劃文花文を施し、全軸。43は明代龍泉窯系青磁碗である。外反する口縁部外面に退化した花弁文を刻み、厚く釉を施している。

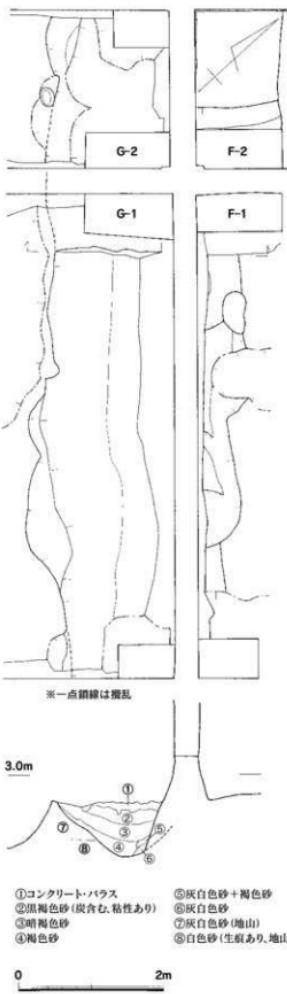


Fig. 15 溝SD100実測図(1/60)

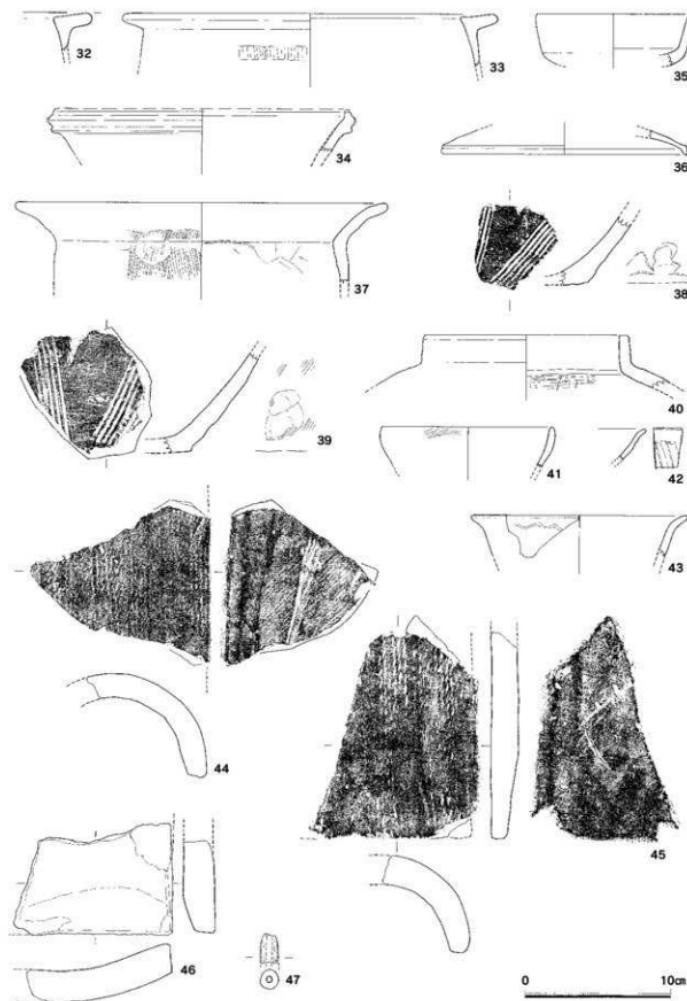


Fig. 16 SD100出土遺物実測図 (1/3)

**44・45**は丸瓦である。ともに凸面に網目タタキを施した後ナデ調整し、凹面には布目痕がある。端部はヘラ調整を加える。灰～灰黒色をなす。**46**は平瓦である。凸面はナデ調整、凹面は磨滅する。焼しにより黒色を呈する。**47**は土鍤である。下半を欠損する。

近世～近代の遺物は主に溝の上層から出土しており、擾乱からの混入遺物と考えられる。38・40・41・43等が溝下層から出土しており、中世後半期の遺構であろう。

#### 溝SD101 Fig.17, PL.5

7ページで報告した建物遺構SP105・SP106の柱列の南側に平行して伸びる小溝である。溝の方位は磁北から49°西偏する。E-1グリッドからE-2グリッドにかけて約8mを確認したが、更に西側に隣接するE-3グリッドでは確認できなかった（図は省略）。溝幅は70cm前後で、やや蛇行する。横断面は逆台形で、深さは東端で30cm前後、西端では5cm前後である。中ほどに50cmほど深く窪む部分があり、土坑又は柱穴が重複しているものと考えられる。

弥生土器を含む土器小片が3点、須恵器小片が1点出土したのみである。図化しうる遺物はなく、詳細時期についても不明である。

#### （3）河川（旧石堂川流路）

調査地の東側を流れる石堂川の旧流路とみられる落ち込みを1区と2区で確認した。この流路は戦国期の大友氏の掘削によるものと伝えられており、Fig.3に示す通り1区から2区にかけて直線的に伸びることから、人為的な開鑿を示唆する。

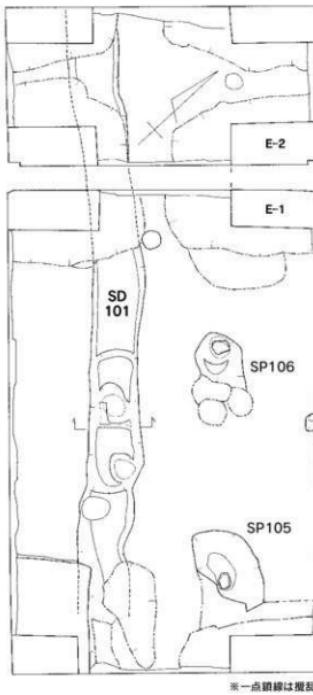


Fig.17 溝SD101及び建物遺構SP105・106実測図(1/60)

#### 1区河川落ちSD007 Fig.18～20・22、巻頭図版、PL.1

SD007は1区の南東部から北西部へ抜ける河川の落ちである。1区は建物基礎で7区画に分断されたため南から北へA～G区とし、各区で土層観察のため幅1mのトレンチを設けた。ただし、東半部はSD007に含まれると想定されたため、各区とも西半部のみを調査対象とした。北端のG区はSD007内に完全に含まれており、表土除去後すぐに埋め戻した。南端のA区では調査区を東へ拡張して落ちを確認しており、この部分で東へ少し蛇行するものと考えられる。

SD007は北端のF区を除き、標高1m前後で一端平坦面を造っており、おそらく犬走りを数段に設けて川床に向かって掘り下げたものと推定されるが、杭などの土留めの遺構は認められなかった。

建物（体育館）基礎により標高2.5m前後まで建設時に削平されており、遺構検出面の地山は暗褐色砂質土で、標高2.2~2.6mを測る。その下層は黒色砂質土→風成砂→粗砂の順に堆積しているが、全体的に風成砂は薄く、風成砂層がないトレンチもある。風成砂・粗砂層の上面で標高2.0~2.4m。粗砂層は砂丘形成前の河川堆積による古いもので、標高0.7~0.8mまで掘り下げたところで湧水した。暗褐色砂質土・黒色砂質土からは中世遺物が出土し、SD007はこれを切り込むことから中世後半の造営と考えられるが詳細時期は不明である。SD007内の堆積層は概ね自然堆積層で、北半のD~F区では上層は木根混じりの客土（土山）であり、染付や瓦等の近世遺物を含む。近世のある時期に埋め立てて寺域の拡大を行ったものと考えられるが、詳細な埋め立て時期は不明である。

#### 1区出土遺物 Fig.21・23

1区のトレンチ掘り下げにより出土した遺物は、弥生土器（甕）、古墳時代須恵器、古代須恵器・土師器、中世土師器、国産陶器、中国產陶器（同安窯系青磁・龍泉窯系青磁）、近世国産陶器（肥前系染付）、瓦があり、コンテナ7箱分の量となる。近代の擾乱等から出土した遺物も含む。

旧石堂川（御笠川）SD007の堆積層及び中世包含層等から出土した遺物を中心化した。

48~50は弥生土器である。48は甕で口縁が「く」字形に屈曲して開き幅が張る。C区SD007。

49は甕の底部片で低い脚が付く。D区中世包含層。50は器台で著しく磨滅する。C区近世溝。

51・52は古墳時代後期の須恵器。51は蓋で天井部外面にヘラ記号がある。C区中世包含層。52は長脚二段透孔の高環脚部。C区SD007。53・54

は古代の須恵器。53は蓋で天井部に鉢が付こう。

A区中世包含層。54は身で外底の内寄りに高台を貼付する。C区SD007。

55~59は中世~近世の土師器である。55は皿で底部糸切り。口径13.2cm。56~59は小皿で底部糸切り。口径は56・57がφ6.3cm、58・59がφ6.6cm。全てC区SD007。60は土師器甕で、古代の玄界灘式製塙土器か。外面に疑格子タタキ、内面に当て具痕が残る。C区SD007。61は龍泉窯系青磁甕で、外面にヘラ彫りで唐草文を施す。C区SD007。62は龍泉窯系青磁碗で外面に錦蓮弁文を施す。B区中世包含層。63は平瓦で、凹面に一部布目が残るが、凹凸面とも粗い刷毛目調整を加える。端部はヘラで面取りする。近世溝。

#### 2区の河川落ち際SD150 Fig.24・25, PL.5・6

2区のD-1~D-3グリッドで検出した河川の落ち際である（以下「グリッド」は「g」と略す）。調査は河岸の落ち際の確認に主眼を置き、東側のA~Cgは埋没河川内に含まれ工事による破壊も及ばないことから、掘り下げを行っていない。

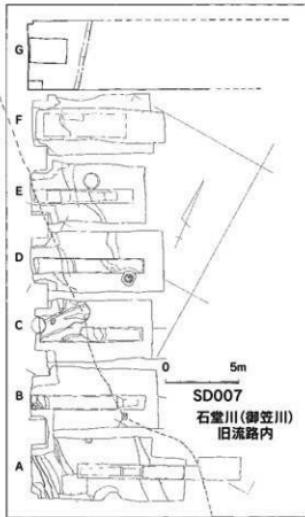


Fig. 18 1区の河川SD007実測図(1/300)

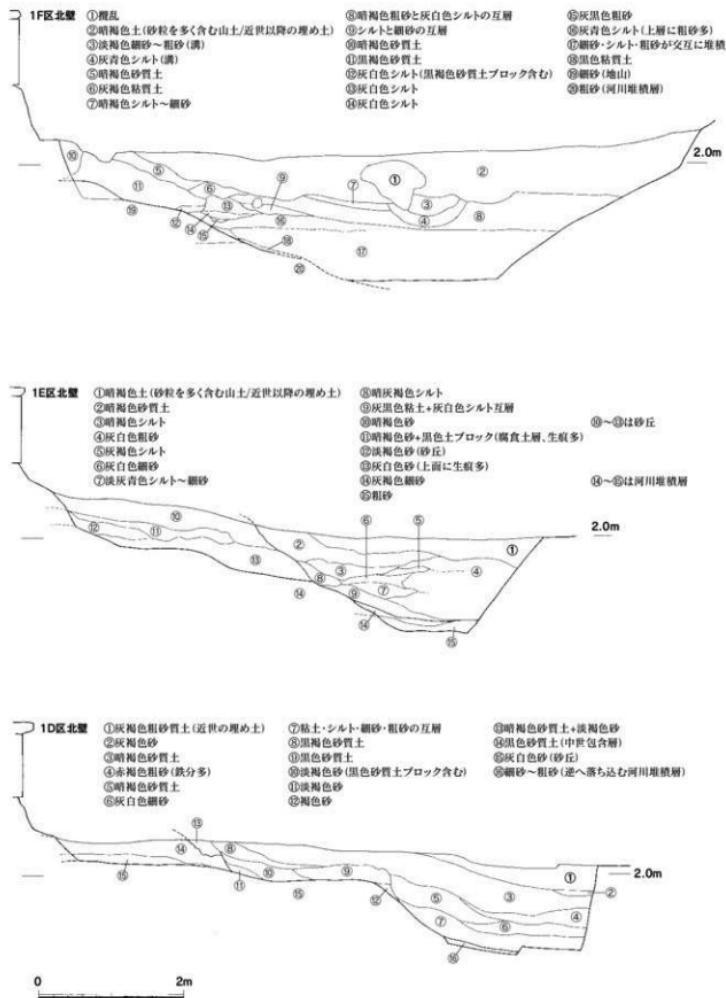


Fig. 19 1D区～1F区トレンチ土層断面実測図(1/60)

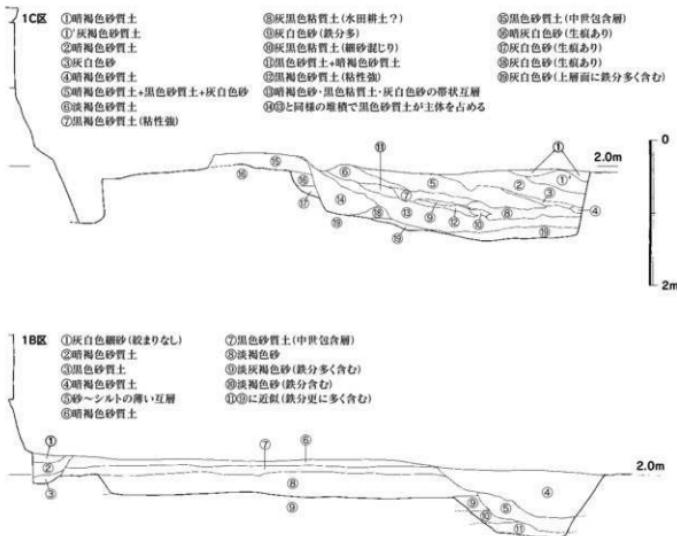


Fig. 20 1B区・1C区トレンドチ土層断面実測図(1/60)

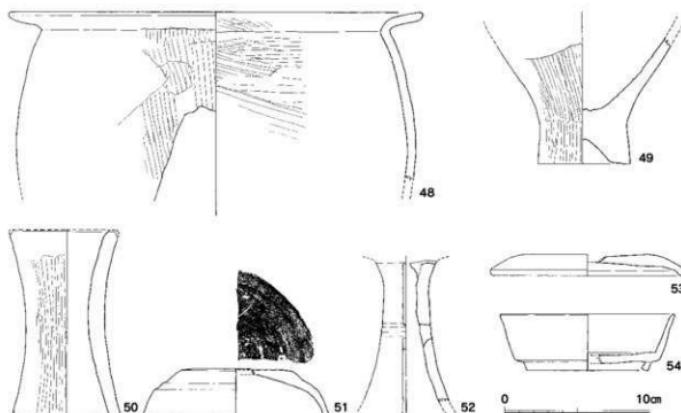


Fig. 21 1区(SD007ほか)出土遺物実測図1(1/3)



Fig. 22 1A区トレント土層断面実測図(1/60)

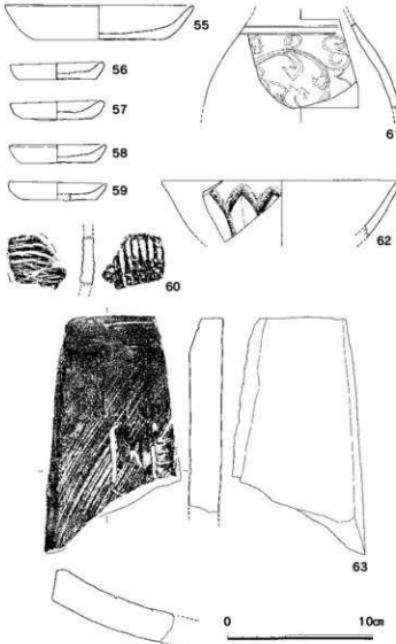


Fig. 23 1区(SD007ほか)出土遺物実測図2(1/3)

D-1gではSD150を全掘した。標高1m前後に平坦面があり緩く東へ下り、1区と同じ状況である。埋土は自然埋没の状況を示す。遺物は上下2層に分けたが、下層まで近世遺物を含む。地山は風成砂で下層に生痕が多い。

D-2gは上層を掘り下げるに留まる。近世遺物が出土した。

D-3g～C-3gでは幅2mのトレンチを設けて掘り下げたが、標高60～70cmで湧水し中断した。東へ緩く下っており、顕著な犬走りは認められない。標高1.5mあたりまでは自然理没層で、これより上位は人為的な理土である。SD150の川岸がある程度自然理没した時期に、一気に埋め立てたものと考えられる。遺物は上下2層に分けて取り上げた。C-3gは上層に近世遺物を含むが、下層は中世遺物のみ出土した。D-3gも上下に分けたが、斜面に位置するため上下ともC-3gの上層に相当し、近世遺物が出土した。地山は上部が風成砂で、標高2m以下は粗砂層となる。

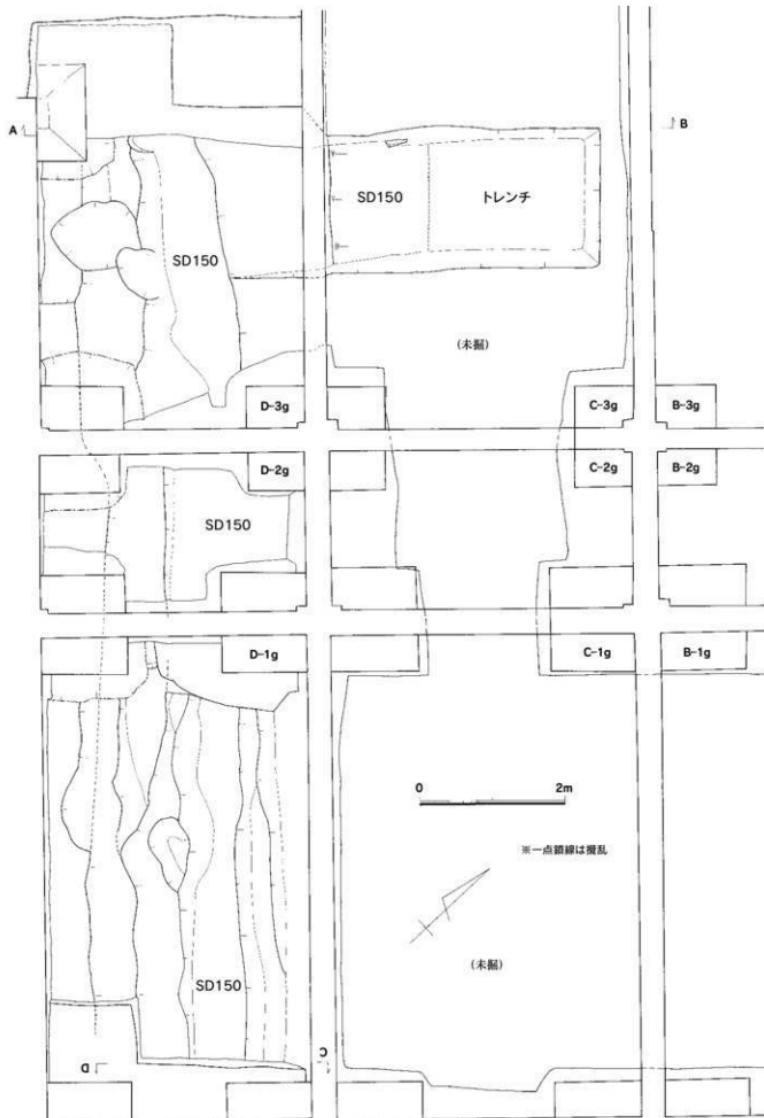


Fig. 24 2区の河川SD150実測図(1/60)

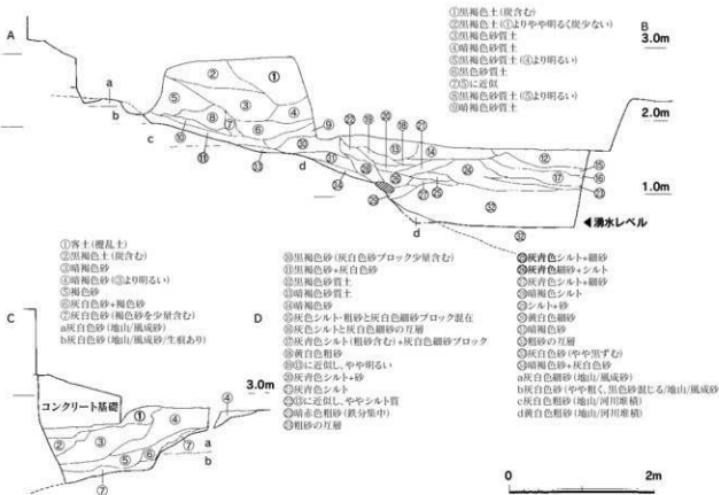


Fig. 25 SD150土層断面実測図(1/60)

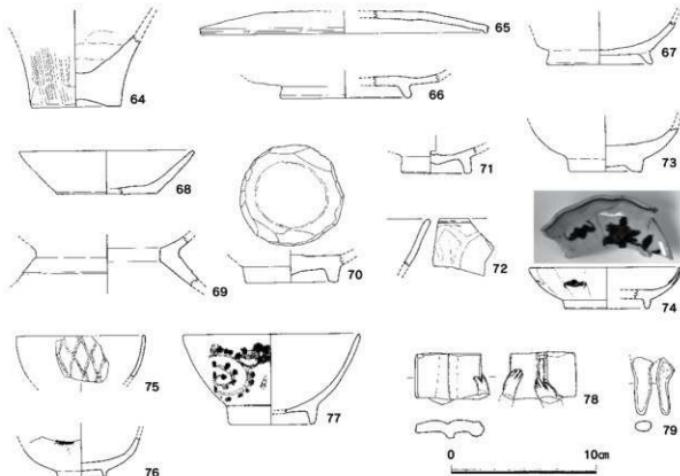


Fig. 26 SD150出土遺物実測図(1/3)

### SD150出土遺物 Fig.26

中世以前では弥生土器、須恵器、古代土師器、黒色土器、中世土師器、土師質土器、瓦質土器、中国産陶磁器（白磁・口禿白磁）、瓦が、近世以後では肥前系陶磁器（白磁・青磁・染付・唐津・陶器）、瓦、博多七輪、土製人形、鉄釘が、合わせてコンテナ6箱出土した。

**64**は弥生土器の底部片で低い脚が付く。**65**は古代の須恵器蓋。**66**は黒色土器B類大塊で内外面にヘラミガキを施す。**67**は土師器塊で歪む。底部ヘラ切りで板圧痕がある。**68**は土師器皿で底部糸切り。復元口径11.8cm。D-1g下層。**69**は近世の土師器か。器台様の形状をなし内外横ナデ調整。黄白色で胎土精良、硬質である。D-1g下層。**70**は白磁碗の底部片で縁辺を打ち欠いた遺具。削り出し高台で外底は露胎。内底はドーナツ状に釉剥ぎする。C-3g最下層。**71**は白磁碗の底部片で、蓋付を除き施釉し、高台内に砂目が付着。胎土は灰白色で粗い。国産品か。D-2g上層。**72**は龍泉窯系青磁碗でC-3g上層。**73**は唐津施釉陶器の碗で、内底にロクロ目が残り高台は削り出し。釉のまわりが悪い。D-3g下層。**74**～**77**は近世後期の肥前系染付で、全てC-3g上層。**74**は稜花皿、**75**は小碗、**76**は丸碗、**77**は広東碗。**78**は開いた書物を手に持つ土製人形の一部で、書物に糸掛けの表現がある。D-2g。**79**も中実の土製人形で「いけどうろう」の一部か。D-3g下層。

### (4) 井戸

井戸SE043 Fig.27、PL.10

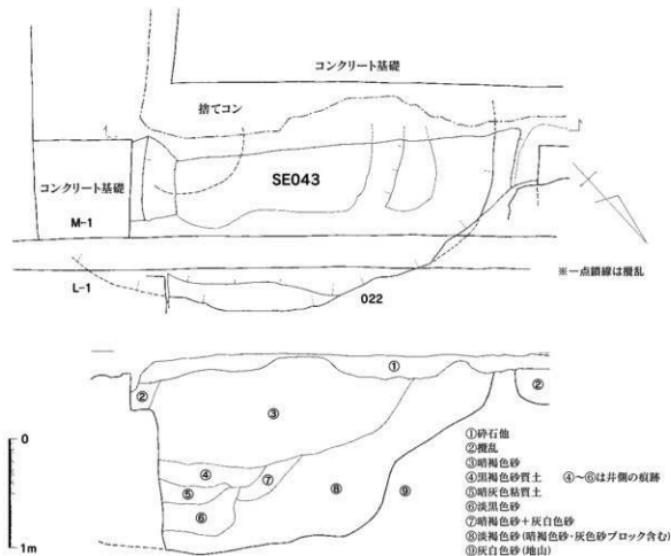


Fig. 27 井戸SE043実測図(1/40)

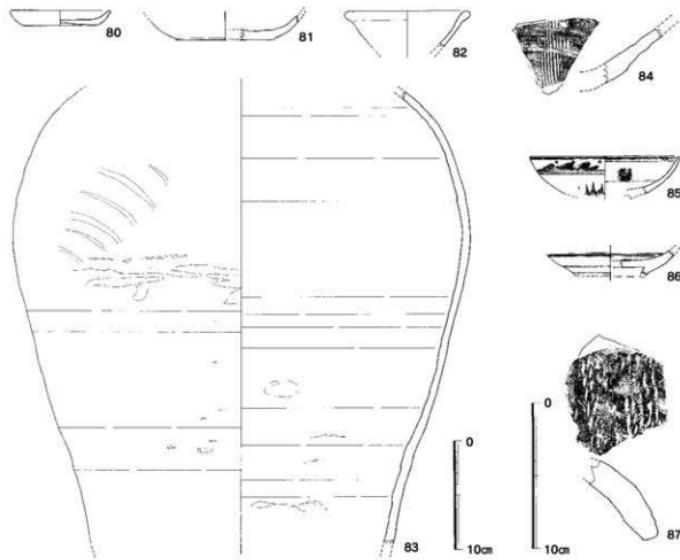


Fig. 28 SEO43出土遺物実測図(83は1/4、他は1/3)

3区M-1グリッドに位置し、L-1グリッドに一部かかる(022)。コンクリート基礎に囲まれて調査範囲が狭く、全体の1/4ほどを確認した。掘り方は梢円形プランとみられ、直径は4mを越えよう。井側は平面では確認できなかったが、土層断面に痕跡が認められた。上層図の③層が井側の上面まで及ぶことから、廃棄時に引き抜いた可能性がある。掘り方の北西壁にステップ状の段があり、掘り方の南東に寄せて井側を置いたものと考えられる。遺構検出面から底面まで深さ1.8m、底面の海拔高は1.1m。湧水は認められない。

#### SEO43出土遺物 Fig.28

弥生土器、土師器（小皿）、土師質土器、陶器、中国産陶磁器（明代青磁・白磁）、近世陶磁器（肥前系染付）、瓦、砥石、鉄釘のほか、近代のスレート片、金具等を含む。コンテナ3箱。

80は土師器小皿で底部糸切り。復元口径6.8cm。上層出土。81は土師器皿で底部糸切り。下層出土。82は黒釉陶器で环か。胎土は黒色で粗、釉は黒色で全釉。下層出土。83は陶器大壺で、内外面にロクロ目を残し、内面下半に指押さえ痕が残る。外面下半ヘラ割り。外面は赤味の強い黒褐色、内面は赤褐色を呈する。外面上半に黄味のある濃緑色釉をハケ状工具で雜に施す。下層出土。84は須恵質のすり鉢で下層出土。85は明代青花の甚筈底皿。下層出土。86は肥前系染付であろう。下層出土。87は丸瓦片で、凸面に粗い網目タタキが残る。上層出土。

周囲をコンクリート基礎に囲まれているため、調査中に遺物が混入した可能性がある。16世紀後半代の井戸と考えておきたい。

## (5) 土坑

### 土坑SK011 Fig.29

3区のC-1グリッドに位置する。包含層SX012の上面で検出した。円形プランをなし、径1.1m前後。断面は逆台形状を呈し、深さ30cmで、底面は平坦である。覆土は暗褐色砂である。

### SK011出土遺物 Fig.30

弥生土器極小片2点、須恵器小片1点、黒曜石チップ1点が出土した。**88**は須恵器である。环蓋の小片で、口縁端部を下方へ折り曲げる。小片のため法量不明、また図の傾きも不確実である。

この遺構が掘り込まれた包含層SX012からは青磁や陶器の小片が少量出土しており、中世以後の遺構と考えられる。

### 土坑SK014 Fig.29

3区D-1グリッドの調査区壁際に位置し、擾乱坑に大きく破壊される。他の遺構が多数切り込むが、東西に長い楕円形プランとみられ、長径2.5m以上、短径1.5m以上であろう。断面逆台形で深さ40cm。覆土は暗褐色砂である。

### SK014出土遺物 Fig.30

弥生土器小片、土師器小片、中世陶器小片、土師質土器（こね鉢）、白磁小片、瓦が少量出土した。

**89**は軒丸瓦で、三つ巴文を配する。瓦当部分のみの残欠である。図示しうる遺物はこの1点のみである。中世の遺構と考えられる。

### 土坑SK021 Fig.29

3区L-1グリッドに位置する。東端を擾乱坑に切られる。溝SD020を切る。東西に長い楕円形プランで、東西1.8m、南北1.3mを測る。断面はすり鉢状をなし、深さ40cm、底面は平坦である。扁平な蝶が二つ出土した。覆土は暗褐色砂である。

### SK021出土遺物 Fig.30

弥生土器（甕・壺）、中世土師器（皿）、青磁小片が少量出土した。

**90・91**は弥生土器甕で、口縁は逆「L」字形に屈曲する。胴外面刷毛目調整、内面ナデ調整、口縁内外を横ナデ調整する。**92**は弥生土器甕の胴部片である。外面を刷毛目調整し、断面三角形突帯を2条貼付して横ナデ調整する。内面ナデ調整。**93**は中世土師器の皿で、底部糸切り。

弥生時代中期の土器がまとまって出土しているが、SD020を切っており中世の遺構であろう。

### 土坑SK025 Fig.29

3区N-1グリッドで検出した。東西を擾乱等に切られて残りが悪い。歪な円形プランで、径1.5～1.6m。断面は逆台形で、深さ35cm。遺構覆土は暗褐色砂である。

### SK025出土遺物 Fig.30

弥生土器（甕・壺・不明）のみが極く少量出土した。

図示した遺物はいずれも弥生土器である。**94**は甕の口縁部小片で、断面三角形に肥厚する。内面ナデ、口縁内外横ナデ調整。**95**も甕の口縁部で逆「L」字形をなし、頸部に断面三角形突帯を貼り付ける。胴部内面ナデ、他は横ナデ調整。**96**は支脚か。端部周辺横ナデ、他はナデ調整。

弥生時代遺物のみが出土したが、遺構覆土は他の中世遺構と同質である。

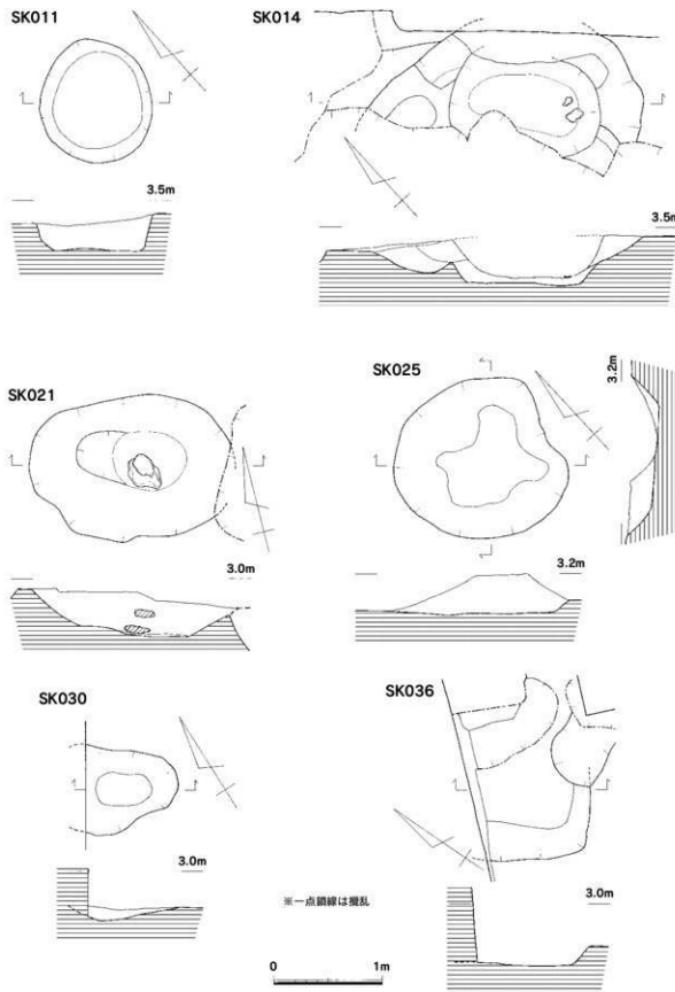


Fig. 29 土坑SK011-014-021-025-030-036実測図(1/40)

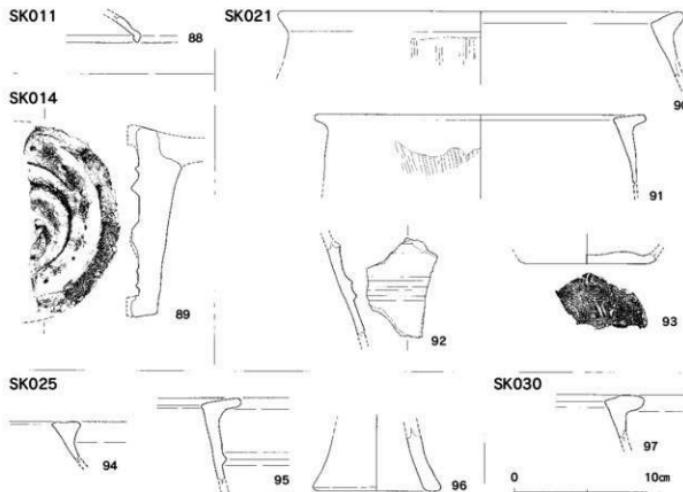


Fig.30 SK011-014-021-025-030出土遺物実測図(1/3)

**土坑SK030 Fig.29**

3区B-2グリッドに位置する。西側は調査区壁にかかる。東西に長い不整梢円形プランで、長径0.9m以上、短径0.8m。浅く窪んでおり、深さ10cm。覆土は暗褐色砂である。

**SK030出土遺物 Fig.30**

図示した弥生土器の1点のみが出土した。97は甌で、逆「L」字形をなす。口縁横ナテ調整で、内面は削減する。中世の遺構とみられる。

**土坑SK036 Fig.29**

3区M-2グリッドに検出した。グリッドの北隅に位置し、コンクリート基礎等で大きく破壊される。隅丸方形プランをなそう。現状で1.1m×0.6m。断面逆台形で深さ20cm弱。覆土は暗褐色砂。

弥生土器小片、土師器小片がごく少量出土したが、図示しうる遺物はない。

**土坑SK037 Fig.31**

3区P-1グリッドに位置する。大型の土坑とみられるが、調査区が狭い上、東側を搅乱坑に大きく破壊されておりプランは不明だが、北隅のグリッドまでは伸びない。現状では調査区の東端に位置し、東へ向かって落ち込んでいく。南北2.7m以上、東西2.5m以上で、深さ1.1m以上。

**SK037出土遺物 Fig.32**

弥生土器（甌）、中世土師器（皿）、土師質土器（こね鉢・すり鉢・火鉢）、国産陶器（唐津他）、中国産陶磁器（白磁・龍泉窯系青磁・口禿白磁・明代青花）、瓦、石硯がコンテナ2箱出土。

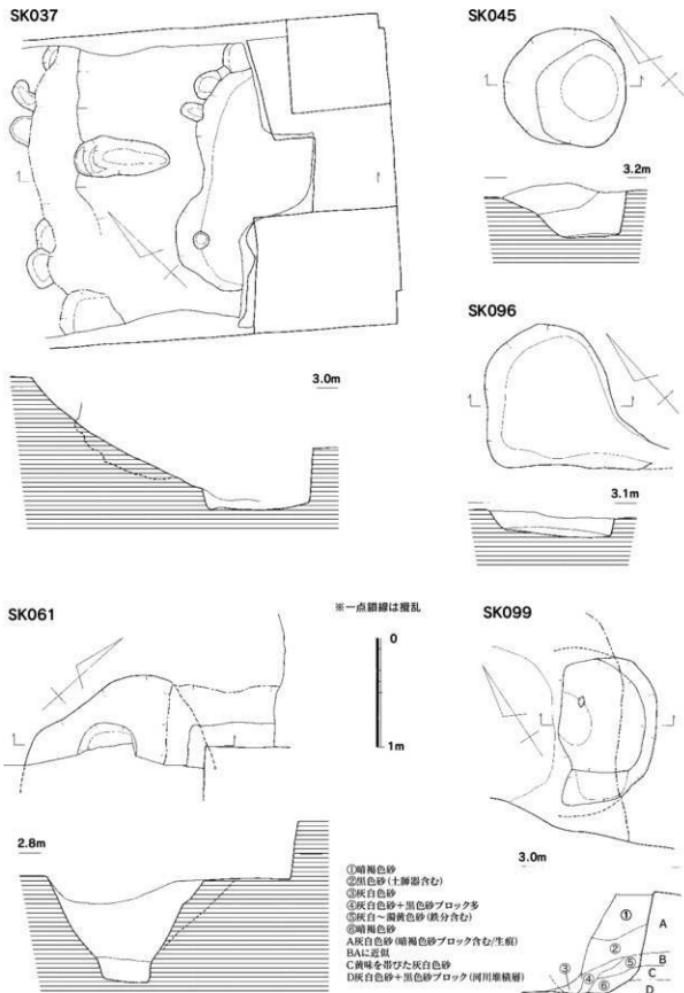


Fig. 31 土坑SK037・045・061・096・099実測図(1/40)

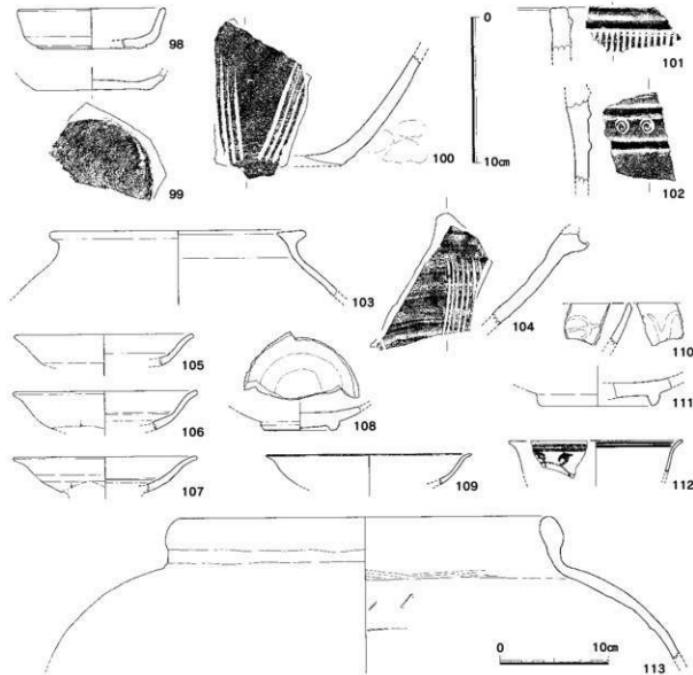


Fig. 32 SK037出土遺物実測図 (113は1/4、他は1/3)

98・99は土師器皿で、底部糸切り。98は復元口径9.8cm。100は土師質土器すり鉢で、外面指押え、内面にスリ目を入れる。101は瓦質土器の火鉢か。口縁外面に突帯を付け、直下に縦沈線を入れる。102は瓦質土器火鉢で、外面に突帯2条を回し、突帯間に渦巻き状の印花文を施す。

103は施釉陶器で、内外面横ナテ調整。胎土は茶褐色で、薄い灰釉をかける。104は唐津陶器すり鉢。横ナテ調整。口縁外面から内面に薄く施釉する。105～107は白磁皿で、内底に削り出しによる突線又は圓沈線がある。105は外底露胎。106は内底を釉剥ぎし、外底露胎。107は内底を輪状に釉剥ぎし、外底露胎。108は白磁底で、削り出し高台。内底をドーナツ状に釉剥ぎし、外底露胎。109は白磁皿で、白色の胎土に青味のある白色釉をかけ、口縁端部に鉄釉を施す。110は龍泉窯系青磁碗小片で、内外面にヘラで施文する。111は龍泉窯系青磁碗の底部片。内底に浅い圓沈線が巡る。高台内露胎。112は明代青花瓈反り碗か。呉須はコバルト色に発色する。113は無釉陶器の大型甌で、口縁は肥厚して内傾する。口縁端部から肩部外面に自然釉がかかる。

植木鉢や土管等の近代遺物は攪乱坑からの混入と思われる。近世の遺構であろう。

### 土坑SK045 Fig.31

3区D-1グリッドで検出した。SD015、SK014に切られており、これらに先行する遺構である。円形プランで径1.1m前後。底面が南東へ偏った形状をなし、深さ50cm。平瓦の小片1点が出土したが、図化できるものではない。

### 土坑SK061 Fig.31

2区L-1グリッド東壁際に位置し、調査区外へ大きく伸展する。現状で円形プランをなし、推定径1.7m前後。すり鉢状に深く、底面周辺は筒状を呈する。深さ1.0m。覆土は暗褐色砂である。

#### SK061出土遺物 Fig.33

弥生土器小片、中世土師器（皿・小片）、平瓦が少量出土した。

114は土師器皿で、底部糸切り。口径12.1cm。中世の遺構であろう。

### 土坑SK096 Fig.31

2区G-1グリッドに位置する。暗褐色砂の中世遺物包含層の上面で検出した、上面遺構である。この下層で満SD100を検出している。不整縁円形プランで、南東側は地山である包含層との境が不明瞭である。径1.3m×1.2m。断面逆台形で浅く、深さは20cm。覆土は黒褐色の粘性土である。

#### SK096出土遺物 Fig.33

弥生土器小片、古代須恵器小片、中世土師器小片、土師質土器小片（こね鉢）、施釉陶器小片、中国産陶磁器（明代龍泉窯系青磁）、備前焼（すり鉢）が少量出土した。

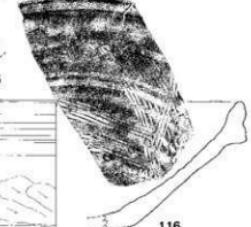
115は明代龍泉窯系青磁碗の底部小片である。全軸。116は備前焼の陶器すり鉢である。体部は横ナデ調整で、外面下半と外底はヘラ削り。内面に11条一組と3条一組の異なるスリ目を雜に入れ。口縁外面に自然軸を被る。備前焼IV期に編年されよう。

中世後半期の遺構であろう。

### 土坑SK099 Fig.31

2区G-1グリッドに位置する。攪乱により遺構の西半分を失う。隅丸方形プランとみられ、径1.5m以上。円筒状をなし、深さ90cm。底面は丸い。土師器皿がまとまって出土した。

#### SK061



#### SK096



#### SK099

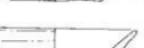
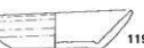
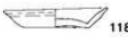
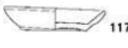


Fig.33 SK061-096-099出土遺物実測図(1/3)

#### SK099出土遺物 Fig.33

図示した遺物のほか、弥生土器小片、中世土器小片がある。

117・118は土師器小皿で完品。底部系切り。横ナテ調整で、内底に「の」字状のロクロ痕がある。口径は順に6.7cm、7.1cm。118は粘土の収縮により底面がヒビ割れる。119～121は土師器皿で、完品ないし一部を欠く完品。底部系切り。口径は順に10.8cm、11.4cm、11.4cm。以上の土師器は歪みのある器形や調整手法が體似し、119を除き色調・胎土も同じである。119は色調が他よりやや明るく、胎土に雲母粒を多く含み、法量も他の皿と異なっている。中世後期の廃棄土坑であろう。

#### 土坑SK110（109・116） Fig.34

2区D-3～E-3グリッドで検出した。D-3グリッドではSK116、E-3グリッドではSK110で遺物を取り上げた。SK110は遺構検出時には方形プランをなしており（SK109）、10cmほど下げたところで円形プランの遺構（SK110）が現れた。別の遺構の可能性もある。上層のSK109はSK116も含めると南北2.2m以上、東西1.8m以上の方形プランで、深さ10cm。SK110はこれにすっぽりと収まる円形プランで、深さ20cm。底面は平坦で、深さ50cmの円形ピットが一つある。SK116はSK117等に切られ全体形が不明。深さ30cmである。覆土はいずれも暗褐色砂である。

#### SK109・110・116出土遺物 Fig.35

SK109は弥生土器小片5点、SK110は弥生土器小片4点、SK116は弥生土器小片が少量と黒曜石チップ1点が出土した。122はSK109から出土した弥生土器甕の口縁部片である。外面継刷毛目、内面ナテ、口縁内外横ナテ調整。弥生時代遺物のみが出土したが、中世の遺構であろう。

#### 土坑SK111 Fig.34

SK110の南側に位置する。梢円形プランで、径0.9m×0.7m。断面逆台形で、深さ25cm。土器小片が5点出土したが、図示できるものはない。

#### 土坑SK113 Fig.34

SK111の南西側に位置する小ピットである。弥生土器がまとめて出土したため報告する。径0.4mの円形プランで、柱穴状をなし、深さ30cm。覆土は暗褐色砂である。

#### SK113出土遺物 Fig.35

弥生土器（甕）、土師器（壺）、銅銭が出土した。

123～125は弥生土器甕である。123は口縁が逆「L」字形をなす。脇部外面は粗い継刷毛目、内面は指揮え後ナテ調整ではほとんど剥落する。口縁内外面横ナテ。外面屈曲部に指揮え痕が残る。124も逆「L」字形口縁で、外面継刷毛目後、頭部に断面三角形突帯を貼付し横ナテ調整。125は底部片で脚が付く。外面継刷毛目調整で、内面は器壁が剥落する。126は古代土師器の壺で、高台が貼り付く。

銅銭の出土からみて、中世の遺構であろう。なお、銅銭は鋳化が著しく判読不能である。

#### 土坑SK117 Fig.34

2区D-3グリッドの河川SD150の落ち際に位置し、斜めに削平を受ける。梢円形プランで、長径1.2m以上、短径1.0m。深さ40cm以上で底面は東へ向かって落ちる。覆土は暗褐色砂で、底面から浮いた位置で叩石1点が出土した。

土器小片2点と石器（叩石）1点が出土した。石器は36ページ（Fig.38-137）に掲載した。

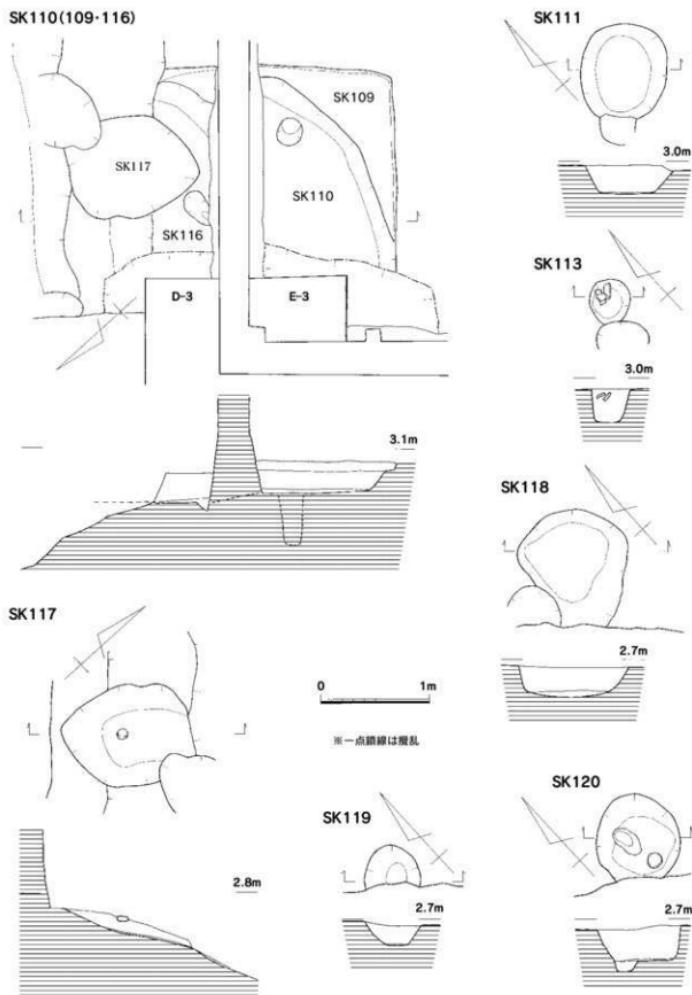


Fig. 34 土坑SK110・111・113・117・118・119・120実測図(1/40)

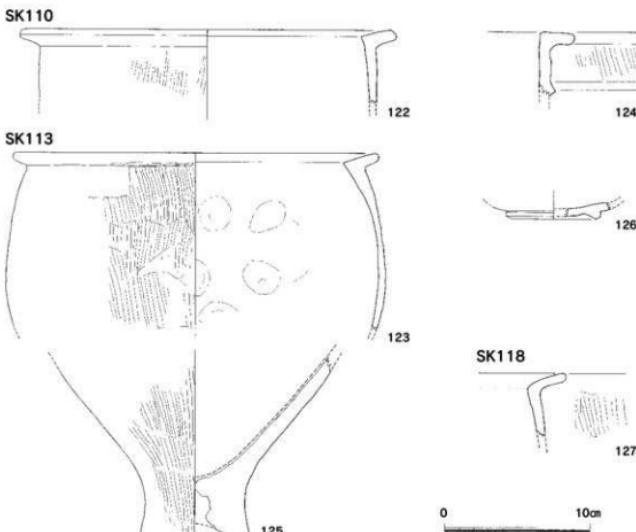


Fig.35 SK110・113・118出土遺物実測図(1/3)

#### 土坑SK118 Fig.34

2区Nグリッドで検出した。SK119に切られる。不整楕円形プランで、南側は調査区外に伸びる。長径1.1m以上、短径1.0m。断面逆台形で、深さ30cm。覆土は暗褐色砂である。

#### SK118出土遺物 Fig.35

弥生土器のみが6点出土した。

127は弥生土器甕で、口縁が「く」字形に屈曲する。大口径の土器であるが、小片のため法量は不明。外面に縱の粗い刷毛目が残る。

弥生土器のみが出土したが、覆土からみて中世遺構であろう。

#### 土坑SK119 Fig.34

SK118の西側に重複し、これを切る。調査区外に伸展する。円形プランで径0.5m。断面逆台形で深さ20cm。覆土は暗褐色砂である。

弥生土器小片が1点出土したが、図示できるものはない。

#### 土坑SK120 Fig.34

SK118・119の北西側に位置する。円形プランの土坑で、南側は調査区外に伸びる。径0.8m。断面逆台形で、深さ30cm。底面は平坦で、小さな窪みが二つある。覆土は暗褐色砂である。

弥生土器を含む土器小片が6点出土したが、図化できない。

## (6) 近世墓

### 土壙墓SK151・SK152 Fig.36 PL.6

旧河川（石堂川）SD150のヘリに位置する。河川SD150の岸部分が埋没した後に、河川に面して営まれた墓と考えられる。2基を検出し、西側よりSK151、SK152とした。ともに覆土は暗褐色砂で近似する。検出時はSK151がSK152を切るように見え、頭骨のレベルもSK151がSK152よりも20cmほど高いことから、SK152→SK151の順を考えたが、SK151の下半身骨が散在すること、対してSK152の上半身の残りが良いことから、SK151→SK152の順であったと考えられる。

SK151の掘り方は長方形プランで、西端は搅乱坑に切られる。長径185cm以上、短径80cm。箱状に掘り込み、深さ約10cmで底面は平坦である。墓壙の北寄りに頭骨があり、中央付近に大腹骨があるか原位置を動いていると思われる。SK152の掘り方は梢円形プランで、北側はSK151と重複してプランが不明瞭である。長径130cm前後、短径90cm。断面逆台形で深さ約20cm。墓壙の北端に頭骨が、南端に脚部の骨がまとまり、その間に腕骨が散在する。図の土層は、①暗褐色砂、②は①より明るい暗褐色砂である。棺材の痕跡は認められない。

SK151からは弥生土器を中心とする土器小片、須恵器小片、施釉陶器（唐津か）が少量、SK152からは弥生土器などの小片が少量出土したが、図示可能な遺物はない。土壙墓が掘り込まれた河川SD150から近世遺物が出土しており、近世後半の造営と考えておきたい。

### SK151・SK152出土人骨 上角智希（福岡市埋蔵文化財センター）

SK151・152の2基の土壙墓から人骨が出土した。人骨の遺存状態は悪く、骨内部の組織は流出し空洞化している。腰骨や肋骨・椎骨などは皆無である。取上げ後も骨が細かく碎ける。長管骨（四肢）の骨端部はすべて消失。パラロイドB72にて強化後、接合した。

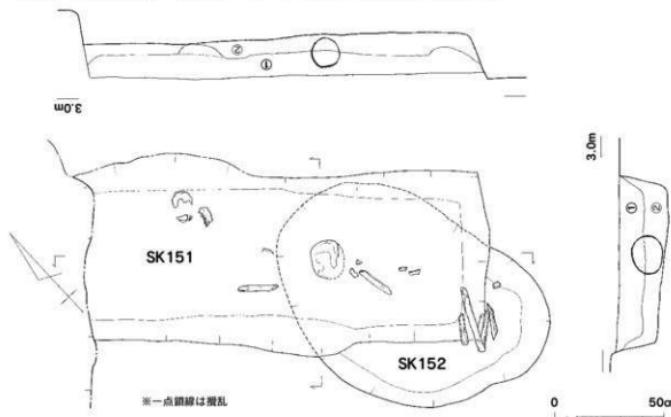


Fig. 36 土壙墓SK151・152実測図(1/20)

SK151出土人骨は、頭蓋骨、下顎骨、歯12本、大腿骨1が残る。歯はすべて咬耗が激しく、平坦に磨耗し象牙質が露出している。よって本人骨の年齢は老年である。性別は不明。頭位を北にとり顔は西を向く。西向きの側臥屈葬だったと推測する。本来下半身があるべき箇所にはSK152人骨があり、出土した大腿骨の位置は不自然である。あるいは別個体かもしれない。

SK152出土人骨は、頭蓋骨、下顎骨、上腕骨1、尺骨1、大腿骨2、脛骨2が残る。遺存状態が悪く明確な判断材料はないが、大腿骨をはじめとして全体的に骨がきしゃで細いことから女性であろう。また、頭蓋骨の縫合線が閉じて癒合している部位が多いことから、年齢は熟年もしくは老年と判断する。頭位を北にとり、顔は西を向く。側臥屈葬で、膝をきつく折り曲げるが、上半身（背骨）と大腿骨がなす角度は100度程度の鈍角である。

#### 4. その他の出土遺物 Fig.37・38、PL.10

擾乱、整地層、表土、詳細時期不明の遺構等から出土した土器、土器以外の遺物を報告する。

128は弥生土器の成人蓋棺である。小片のため法量不明。断面「T」字形をなす。磨滅し調整不明。擾乱坑SK058出土。129は古墳時代後期の須恵器環形で、蓋受けの立ち上がりは低く内傾する。3区N-1g擾乱坑。130是中国産白磁の稜花皿である。2区B～C-1g。131は土製人形の頭部で、中実。左目と顔の下半が残る。頭下面に浅い孔がある。132は中空の土製人形で袖・帶・裾等が表現され、頭部と下半身の大半は欠けるが、解せになった着物姿の女性を表現したものであろう。裏面は中央部分が窪み、絡み合う数本の脚が表現されている。131・132はC-1g清掃時出土。

133は石庖丁で硬質砂岩製。SD100最下層。134は磨製石剣の一端か。鏽は認められない。粘板岩製。SD20。135は今山産の太型蛤刃石斧。2区K-1g包含層。136は柱状の砥石片で、頁岩製。SE043上層。137は卯石で、両面に浅い彫みがあるが、背面はごく浅い。側縁は敲打痕が全周する。花崗岩軸石を用いる。SK117出土。138・139は石硯で、ともに背面側も硯として使用しており、欠損後に裏面を硯に加工して再利用している。138は陸部がよく磨滅し、縁辺に鱗状

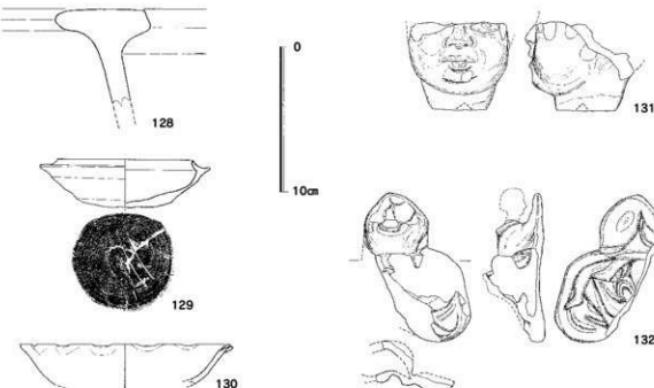


Fig. 37 その他の出土土器・土製品実測図(1/3)

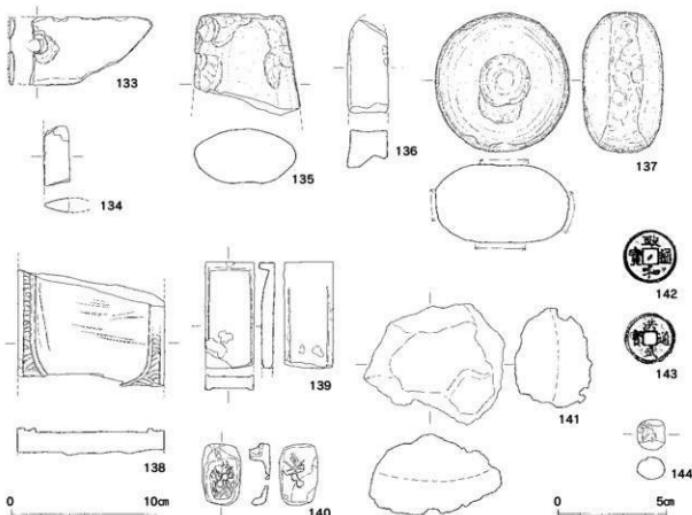


Fig. 38 石製品・鉄製品・銅製品実測図(142~144は1/2、他は1/3)

の装飾がある。SK037。139も最終使用面に墨痕がよく残る。石材は粘板岩か。2区J-1g包含層。140は石錫片を転用した滑石製の墨壺か。窪み周りに墨痕が付着する。L字形に紐孔を貫き、裏面に「禾」様の線刻がある。窪みには多数のキズが付けられ、底には2孔が貫通しており、この品を廃棄するに及んで使用不可能にした後、捨てたものと思われる。IC1区SD007。

141は碗型洋で、底部に鉄分が多く上部は洋が主で重量がある。SD100下層。142は銅錢「政和通寶」。143は同じく「洪武通寶」で他に3枚ある。ともに攢乱坑出土。他に「寛永通宝」1枚と、銘で判読不能の銭が2枚ある。144は鉛の玉である。外表面は剥落する。SD010下層。

### 第三章 おわりに

調査区内の遺構面標高は3.4m~2.2mで西側が僅かに高く東へ傾斜する。地山の風成砂層は薄く、博多浜から箱崎浜へ伸びる砂丘の鞍部に当たると考えられ、この鞍部を利用して石堂川が開鑿された可能性があろう。石堂川の掘り方(SD007・SD150)は中世後半の遺物包含層を切り、近世に埋め立てられているが、その詳細時期は不明である。検出遺構は中世後半の溝6条、井戸1基等で、聖福寺の建物(塔頭)に伴う可能性があるが、全体的な様相までは不明である。

各調査区から弥生土器(中期前半~後期前半)、古墳時代後期の須恵器、古代の土器等が散発的に出土したが、該期の遺構は認められない。特に弥生土器は一定量が出土しており、中世の削平により遺構が消滅した可能性がある。また、今回調査を行った旧学校敷地の北半は構造物による破壊が著しいが、南半の旧運動場部分の遺構の残りは良好と考えられる。

PLATES  
(図 版)



2区調査作業風景（西から）

PL.1



1. 1区全景（南東から）



2. 1C区SD007（石堂川流路落ち）土層断面（東から）



2区全景（南西から）



1. 2区西半部（東から）



2. 2区東半部（南東から）



1. 2区溝SD068 (南から)



2. 2区溝SD100 (南から)



1. 2区満SD101・建物遺構SP105・SP106（南から）



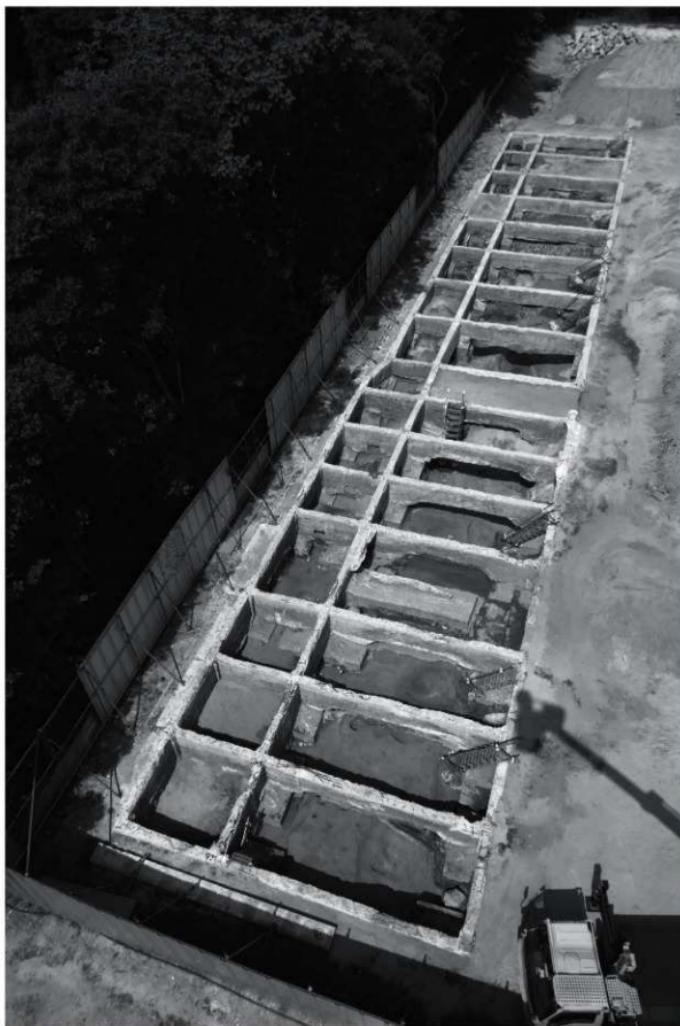
2. 2区D-1グリッドSD150（石堂川流路落ち）（南東から）



1. 2区C・D-3グリッドSD150（石堂川流路落ち）（北西から）



2. 2区土壤蔽SK151・152（南から）



3区全景（南西から）



1. 3区西半部（東から）



2. 3区東半部（南東から）

PL.9



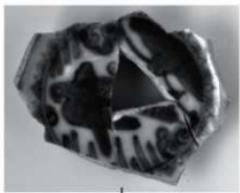
1. 3区溝SD010 (西から)



2. 3区溝SD020 (南東から)



1. 3区井戸SE043（北西から）



140



26



2. 出土遺物（縮尺不同）



132

## 報告書抄録

ふりがな	はかた 150						
書名	博多150						
副書名	-博多遺跡群第196次調査報告-						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1268集						
編著者名	吉武 学						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667						
発行年月日	2015年03月25日						
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
博多遺跡群 第196次 調査	福岡市博多 区御供所 町23-1、 22-9-16	40132 0121	33度 35分 53秒	130度 24分 56秒	20130701 20131024	1,600	国史跡聖福 寺境内の現 状変更(校 舎解体)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群 第196次 調査	集落・ 寺院	弥生時代～ 現代	建物遺構、溝、井 戸、土坑、土壤墓、 整地層、包含層	弥生土器、須恵器、 土師器、中国産陶磁 器、朝鮮半島産陶磁 器、瓦、石製品、鉄 製品、銅製品	中世都市博多 の一部を構成 する集落跡		

## 博多 150

-博多遺跡群第196次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1268集

2015年(平成27年)3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大野印刷株式会社

福岡市博多区桜田2丁目2-65